

十全同窓會會報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓會會報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…佐藤保十全同窓會會長)

新年のご挨拶

十全同窓會會長 佐藤 保



会員の皆様明けましておめでとうございます。昨年は十全同窓會にとりまして誠に記念すべき意義ある年でありました。創立百五十周年の記念式典、記念講演会を開催し盛大に開学を寿ぎ、未来への展望を開いたことを慶んでおります。百五十周年記念誌や「医の源流・未来への継承」なる群像も完成し百五十年の歴史に形と内容を添えることができました。この事業に関しては、全国の同窓会員の一方ならぬご協力を賜りましたこと、ここに厚く御礼と感謝を申し上げます。ただしこれで記念事業が終わる

た訳ではありません。病院正門から十全講堂までのプロムナード整備という大きな事業が残っております。しかしこの事業は臨床研究棟の解体と医学図書館の改築が済まないことには整備できませんので、時間がかかります。何卒この事業が完成するまで変わらぬご支援をお願い申し上げます。

昨年百五十周年記念事業と平行して進められた作業に、同窓會名簿の改訂がありま

す。加藤編集委員長を始め編集委員各位の努力により、昨年未までに改訂作業を終わることが出来ました。新名簿は早々にお手元に届くと存じます。この改訂作業に係わって感じましたことは、私が担当した七十歳後半から八十歳にかけて、名簿の記載事項に大きな変動があることです。診療所をやめられる方、老人ホームに移られる方、お亡くなりになられた方など、人生の大きな転機がこの年代に押し寄せることを今更のごとく実感しました。

時代の変わり目といえば、目を学外に向けたとき、わが国のあり様は東日本大震災を契機として大きく様変わりを致しました。自然がときに見せる強大なエネルギーの前に、人間はなすすべもなく打ちひしがれるようです。これまで安全神話のお神輿に担がれて、それほど痛切に考えなかった原子力の安全管理が、人間の力では全く無力であることが露呈されました。故郷を失い流浪の人にならないため、今何をすべきかが問われております。

十二月に行われた衆議院選挙で与党は惨敗、自民が過半数の議席を得て行政が交代しました。しかし乱立した十二党の政策は四分五裂しており、いかに国論を統一するのかが不透明な状況です。

そんな国内事情に重なる、ロシアとの北方問題、尖閣諸島をめぐる中国との摩擦、竹島で対立する韓国との軋轢が起り、外交関係は弱り目に祟り目です。これらの問題解決には当面有効な打つ手が見当たらず、時間がかかると思われます。さらに経済問題でもTPP(環太平洋経済連携協定)に参加するかしないかは日本の近未来を左右するだけに、農業、林業、医療界から強い反対が沸き起こっており、国論は二分された状況です。

世界に例のない速度で進む高齢化のため、すでにわが国の人口は減少に転じ、少子化対策もこれに歯止めをかけることは困難です。団塊の世代は労働人口からぬけ、一方若者の就職難で実質の労働人口は減少しております。今後GDPの増加が期待できないとすれば、高度成長から現状維持社会へと発想の転換を余儀なくされます。その意味で日本社会は大きな転換期にあるといえます。人々の知恵を結集してこの難局を乗り越えたいものです。

目次

新年のご挨拶	1
医学部創立百五十周年記念 事業の進捗状況	2
就任挨拶	3
受賞	4
学会報告	5
論説	7
病院紹介	8
教室だより	10
会長報告	12
支部だより	12
クラス会	13
学生課外活動支援報告	16
教授退職記念講演会・ 記念式のお報せ	19
十全昔話	20
学生コーナー	23
ホームカミングデイ	24
編集後記	24

医学部創立百五十周年記念事業の進捗状況

金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員長

金沢大学医薬保健学域医学類長 山本 健

平成二十四年十月一日発行の同窓会会報第百五十二号にご報告した「医学部創立百五十周年記念事業の進捗状況」以降の状況を報告します。

一、皆さまからお寄せいただいた寄附金について、ご報告いたします。昨年十二月十七日現在、寄附金額は一億九百六十七万七千五百五十五円に達しました。（式典当日のご寄附二十三万円を含む）このうち二千四百六万円は、平成二十年六月から金沢大学医学系教員・病院教員が毎月積み立てて来た寄附金です。ご寄附を賜りました同窓会員各位のご協力に対して、心から御礼を申し上げます。

この募金計画は、二〇一五年（平成二十七年）三月までの予定になっております。その時点までの募金額はすでに着工した事業に四千万円、今後着工する医学類正門周辺整備事業に八千万円、計一億二千万円を目標にしております。万事ご多端の折りまことに恐縮ですが、まだご寄附をいただいていない関係各位におかれましては、記念事業達成のための募金の趣旨にご賛同くださり、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。前号に同封させていただいた振込用紙をご利用いただくか、医学部創立百五十周年記念事業ホームページ（http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin_med150/）を通じてお申し込みいただければ幸いです。

二、創立百五十周年祝典関連の支出詳細をご報告します（表1）。記念祝典関連五十一万七千円、記念講演会関連五十六万二千三百六十円、モニュメント関連二千五百八十八万九千二百五十円、祝宴関連九百九十四万九千六百二十七円、計三千六百一十二万八千二百三十七円の支出になりました。

三、「金沢大学医学部創立百五十周年記念誌」はお陰様で多くのご注文をいただき、頒布可能な記念誌は百部ほどしか残っていません。本記念誌を現在の頒布価格で再度発刊することは不可能です。特に現役の医学類学生諸君と保護者の皆さまには、本学医学部の歴史と業績をご理解いただくための、第一級の史料です。記念誌購入のご希望は、医学系総務係（076-265-2105 山本 修係長）にお申し込み下さい。

四、創立百五十周年記念事業のうち、まだ着手していない医学類正門周辺整備事業は、金額的に最大の事業です。整備事業の内容について、本年九月末に金沢市と本学の話し合いが持たれましたが、金沢市関係部局の意見集約が不十分で、本学が希望する整備事業内容との折り合わせを行う段階に至っておりません。今後とも、大学本部角間（施設管理部等）と協力して交渉を進めたいと思います。

（表1）支出項目別合計

（同窓会会報 152 号報告額）
概 算 額

支 出		概 算 額
祝典講演会関係連	517,000	500,000
記念講演会関係連	562,360	560,000
モニュメント関係連	25,889,250	25,800,000
祝宴関係連	9,149,627	9,150,000
合 計	36,118,237	36,010,000

支出詳細

記念式典関連	517,000	お土産	2,060,800
講師、招待者旅費	317,000	USBメモリ	1,575,000
参加者交通費等	200,000	手提げ紙バック	192,000
記念講演会関連	562,360	金大煎餅	275,000
講演者謝金	562,360	のし袋	18,800
モニュメント関連	25,889,250	広告	1,050,000
周辺整備（土木）	2,572,500	北國新聞	1,050,000
周辺整備（電気）	21,000	式典	5,538,792
モニュメント制作	12,495,000	記念式典会場設営	452,970
銘板	1,365,000	モニュメント除幕式会場設営	358,785
モニュメントエスキース	2,335,750	祝賀会会場設営	1,219,890
制作者謝金	7,100,000	祝賀会飲食費	
祝宴関係連	9,149,627	buffet	1,575,000
印刷物	398,700	飲み物	667,422
招待状	62,700	祝賀会運営	842,100
案内チラシ	178,000	記念事業運営	422,625
払込取扱票	75,000	消耗品	101,335
記念事業案内状	58,000		
礼状	25,000		
総 計			36,118,237

就任挨拶

金沢大学附属脳・肝インターフェースメデイシン
研究センター教授に就任

河崎 洋志 教授



このたび
本学医薬保
健研究域、
脳・肝イン
ターフェー
スメデイシ
ン研究セン
ター分子神経科学部門および医学系脳細
胞遺伝子学研究分野を担当させて頂くこ
ととなりました。本分野は偉大な先達
東田陽博先生が主宰された伝統に輝き、
その後任の果たすべき職責の重さを痛

感受しております。
私は平成二年に京都大学医学部を卒業
後、同大学神経内科に入局し神経内科診
療に四年間携わりました。次いで京大
学院医学研究科、京大再生医科学研究
所、米国デューク大学／ハワードヒュー
ズ医学研究所にて脳神経医学研究の薫陶
を受けました。帰国後は東京大学大学院
医学系研究科で研究室を主宰させて頂き
ました。この間、素晴らしい指導者に恵ま
れ、多くの先生方から篤い御支援を拝受
し、多数の優れた友人や大学院生に助け

られて参りました。これまで頂戴しまし
た御温情に深く感謝を致しております。
専門は脳神経系の分子遺伝学的研究
で、具体的にはまず胚性幹細胞からドー
パミン作動性神経細胞への試験管内分
化誘導法を創案しました。この方法はi
PS細胞からの分化誘導のために山中
伸弥先生にもお使い頂いております。そ
の後、高等哺乳動物を用いた脳神経系の

形成制御機構、視覚神経系の発達制御機
構に関して新知見を拓いて参りました。
今後は受け継いだ本学の創立百五十
年の燦然たる歴史に些かなりとも残る
べき貢献を目指し、懐かしい故郷にて全
力を尽くす所存でございます。十全同窓
会の諸先生方の御高導と御鞭撻を賜り
ますよう何卒宜しくお願い申し上げ
ます。

略歴

平成二年 京都大学医学部医学科卒、同附属病院神経内科入局
平成六年 京都大学大学院医学研究科入学
平成十年 京都大学再生医科学研究所助手（後に講師）
平成十四年 米国デューク大学／ハワードヒューズ医学研究所研究員
平成十六年 東京大学大学院医学系研究科特任助教授
平成二十五年 金沢大学医薬保健研究域教授

山梨大学大学院医学工学総合研究部
医学学域歯科口腔外科学講座教授に就任

上木 耕一郎 教授



金沢大学医
学部十全同窓
会の先生方
におかれま
してはます
ますご健勝
のこと
とお慶び
申し上げます。
この度、平
成二十四年
十月一日付
で、山梨大
学医学部
歯科口腔
外科教授
として着
任すること

なりました。金沢大学歯科口腔外科に平
成五年に入局、平成十年三月に金沢大
学院を卒業させて頂いたとき、お世話に
なりました諸先生方には深く感謝申し
上げます。大学院卒後ずっと金沢大学に在
籍させて頂いただったので当然、金沢
大学への愛着は強く、先生方、スタッ
フの皆様は深く感謝しております。特に金
沢大学では顎変形症治療、研究に従事し

てまいりました。この成果が、幸運にも
山梨大学で認められたものと思ってお
ります。この分野の臨床、研究に多大な
ご協力を頂きました先生方、患者様にも
御礼申し上げます。大学における歯科口
腔外科講座の最も大きな役目は臨床、こ
れに関連した研究業績、教育（人材育成）
です。ので、これを実践していくことが責
務だと考えております。山梨大学の新し
い医局員で力を合わせて新講座を發展さ
せていきたいと思っております。今後と
も、金沢大学十全同窓会の先生方には多
大なるご支援をお願いすることになるか
と思いますが、よろしくお願いいたしま
す。

平成二十四年
秋の叙勲・褒章

瑞宝小綬章

北原 哲

（昭和四十二年卒業）

瑞宝双光章

河合 康守

（昭和三十四年卒業）

第四十一回医療功労賞

川浦 幸光

（昭和四十八年卒業）

受賞

第六十六回北國文化賞受賞

太田 哲生教授 (昭和五十四年卒業)

この度、はからずも第六十六回北國文化賞受賞の栄に浴し、身に余る光栄と深く感謝しております。そして、受賞に際しまして、多くの十全同窓会の皆様方からお心のこもった祝辞や過分なお心づかいをいただきまして、誠に有難うございました。心より御礼を申し上げます。また、これまでご指導いただきました故宮崎逸夫教授、三輪晃一前教授をはじめ、旧第二外科学教室の同門の先生方ならびに教室のスタッフの皆様方にも深く感謝いたしております。

平成二十二年七月に金沢大学附属病院が北陸で初めて脳死肝移植認定施設(全国で二十二施設が認定)に指定され、平成二十三年十月十日に北陸で第一例目の脳死肝移植手術が成功裡に終わり、さらに六十例以上にもおよび生体肝移植手術のこれまでの実績が高く評価されて、今回の受賞に至ったものと考えております。

脳死臓器移植に関しては法律の一部が改正(改正臓器移植法)され、平成二十二年一月十七日からは臓器を提供する意思表示に併せて、親族に対し臓器を優先的に提供する意思を書面により表示できるようになりました。また、平成二十二年七月十七日からは本人の臓器提供の意思が不明な場合でも、家族の承諾があれば臓器提供ができるようになり、これにより十五歳未満の脳死患者か

らの臓器提供も可能となったわけであり、ます。この改正臓器移植法の施行に伴って脳死臓器移植の増加が予想され、脳死肝移植の認定施設がこれまでの十三施設から、金沢大学附属病院を含めた九施設が新たに加えられて全国で総計二十二施設となりました。この脳死肝移植手術は、予定手術で行う生体肝移植手術とは違って、日本臓器移植ネットワークからドナー発生の緊急連絡が入れば昼夜を問わず脳死肝移植に向けた準備を速やかに整えなければならず、手術を行う肝移植外科医だけでなく、肝臓内科の先生、集中治療部の先生、麻酔科の先生、そして手術場の看護師さんなど多くの病院スタッフが万障繰り合わせて緊急移植手術に臨むこととなります。今回の第一例目が大変幸運だったのは、緊急移植手術が行われた日が休日であったということであり、ます。今後は予定手術が多く組まれている平日でも各外科系の先生方のご理解とご協力を得ながら、この脳死肝移植の緊急手術を安全かつ確実に行えるような診療体制を築いていきたいと考えております。

今後、この受賞を励みに、より一層の研究を積みながら、北陸地方での移植医療の成績向上に努めて参る所存です。今後とも、皆様方のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

第二十七回日本糖尿病合併症学会 Young Investigator Award 受賞

東京女子医科大学
第三内科(糖尿病センター)
三浦 順之助 (平成四年卒業)

平成二十四年十一月二日、福岡で行われた第二十七回日本糖尿病合併症学会において、「AGE-RAGE系から見た糖尿病細小血管合併症の発症と進展」のテーマで Young Investigator Award を受賞しました。

今や国民病とまでいわれる糖尿病による細小血管合併症は、糖尿病性腎症による新規透析導入患者数に代表されるように増加の一途にあります。原因の一つとして考えられている、還元糖と蛋白質が脱水縮合などを経て生成される最終糖化産物AGE (advanced glycation endproducts) やその受容体 RAGE (Receptor for AGE) への関連が、私は研究開始当初から1型糖尿病患者を対象として臨床的検討を重ねてまいりました。RAGE発現量と細小血管合併症進展の研究を経て、後に発見された可溶性esRAGEの発現低下が合併症の進展に影響を及ぼすことが明らかとなりました。また、近年開発された皮膚AGE定量装置を用いて測定したAGE由来蛍光強度が、1型糖尿病患者で長年の血糖コントロールを鋭敏に反映することを明らかにし臨床での応用を検討しております。今後は糖尿病による血管合併症発症抑制のために微力ながら尽力できればと考えております。長年ご指導いただきました山本博先生、内潟安子先生、山本靖彦先生に心より感謝いたします。

第六十二回日本体質医学会総会 若手研究奨励賞受賞

金沢大学医薬保健研究域医学系
恒常性制御学

乙田 敏城 (II会員)

平成二十四年十一月三日、大阪で開催された第六十二回日本体質医学会総会において、若手研究奨励賞を受賞しました。演題名は、「肥満は肝プロテアソーム機能障害を介して小胞体ストレスとインスリン抵抗性を誘導する」です。本学会は一九五〇年に発足し、現在世界規模で増加の一途を辿っている糖尿病、癌、アレルギー疾患等の生活習慣病を研究対象とし、遺伝素因と環境要因との相互作用によって形成される個々人の「体質」の観点から、その病態を明らかにすることを目的としています。肥満は生活習慣病の基盤病態であるインスリン抵抗性を形成します。近年、肥満が小胞体ストレスを介してインスリン抵抗性を惹起することが報告されましたが、肥満がいかなる機序で小胞体ストレスを引き起こすのかは不明のままでした。私たちは、肥満を有するヒトの肝臓でプロテアソーム関連遺伝子が発現変動していることに着目し、遺伝子改変マウスと細胞実験から、肥満がプロテアソーム機能を障害すること、プロテアソーム機能異常が小胞体ストレスとインスリン抵抗性の原因となることを証明しました。今後は、プロテアソームが生活習慣病の治療標的となる可能性をさらに探求していく所存です。本成果は米国糖尿病学会誌Diabetesに掲載されました。ご指導頂いた金子周一教授、篁俊成教授、ならびにご協力頂いた多くの先生方に心より御礼申し上げます。

第二十三回 日本緑内障学会

第二十三回日本緑内障学会を金沢大学眼科学教室の担当で、平成二十四年九月二十八～三十日に金沢市で開催致しました。北陸地方では初めての開催です。会場は金沢駅前の石川県立音楽堂とANAクラウンプラザホテル金沢です。日本緑内障学会には、約千六百名の参加者があり、盛會裏に終りました。千六百名の参加者数は、過去では東京や大阪の開催に並ぶものであり、地方都市開催では過去最高の参加者数でした。

本学会のテーマは「緑内障にサイエンスの三つの眼(芽、目、眼)」でしたが、これは約一週間考えに考えて決めました。このテーマは、緑内障学会のみならず、当教室

のテーマとしても「眼科にサイエンスの三つの眼(芽、目、眼)」としても良いのではと思っています。解説しますと、一、サイエンスの芽とは、学問としての眼科学に興味をもつ若い医師、研究者の芽を育てること、二、サイエンスの目は、サイエンスの目を持って日常の眼科診療を実践すること、そして、三、サイエンスの眼とは、学問としての眼科学の実践、即ちエビデンスを作る人材の育成です。我々はEBM (Evidence-Based Medicine) としての医療を実践しているわけですが、それだけでは良い医療はできて医学は発展しません。即ち、将来の医療のために、エビデンスを作る姿勢の医療、臨床研究、基礎研究こそが、大学人の使命だと思います。学会の目玉は、日本人三名、韓国人三

名の緑内障エキスパートによる日韓合同シンポジウム「正常眼圧緑内障の病態に迫る」を企画しました。招待講演にはイギリスのロンドン大学 Moorfields Eye Hospital の Peng Tee Khaw 教授に「安全・確実な緑内障手術」の講演を、カナダの Dalhousie University の Balwantrey C. Chaudhary 教授に今話題の「光干渉断層計」の話をさせて頂きました。また、特別講演には私の同級生の京都大学生命科学の垣塚彰教授に「神経保護」の話を、須

田記念講演は京都の千原悦夫先生から「視神経萎縮」の講演を賜りました。



私は、会長がかくも忙しいものとは思いませんでした。学会中に特別講演、シンポジウム、セミナーの座長が八つ、自分の講演が二つ、会議が十個と、会場を分単位で移動をしていました。最終日の九月三十日に台風のおまけはありましたが、何事も一〇〇%はありません。台風に対しても、冷静沈着に対処できたことは、学会スタッフである教室員のさ

高安賞創設十周年 臼井国際奨学金創設五周年記念シンポジウム

指導いただきました先生方のご協力のお陰で高安賞創設十周年、臼井国際奨学金創設五周年記念シンポジウムが平成二十四年十一月十日宝町キャンパスで開催されました。この会は「金沢大学創基百五十年」の記念行事の一環として医療保健学総合研究科長・医薬保健研究域医学系長、山本博先生を中心として企画され、私共の教室が事務を担当しました。これは、高安賞が、馬淵宏先生が医学部

長をされていた時、臼井先生の全面的な協力により始まったことによるご縁かもしれません。また、臼井国際奨学金は山本博先生の発案で創設されたもので、海外からの留学生を対象としての奨学金として大変名誉ある制度となっています。



今回のシンポジウムでは、臼井 溢先生（医療法人明徳会理事長、協立十全病院院長）のご挨拶の後、高安賞受賞者の Dr. Khin Mar Myint（ヤングン大学）、Dr. Jin Duo（ハーバード大学）、Dr. Shin Yeonsook（ロンドンゴア大学）、Dr. Feng Xingmin（NIH）、Dr. Wu Yu（中国）、長瀬郁子先生（有人宇宙システム株式会社）、橋本谷祐輝先生（コロンビア大学）、梅曉子先生（金

なる自信となったと思います。皆様の力を持つて緑内障学会は大成であったと自負しております。教室の医師や視能訓練士、学会事務局の方には、とてもお世話になりました。そして、何よりも金沢大学眼科学教室同門会、金沢大学十全同窓会の先生方のご支援に深く感謝致します。

（学会長 杉山 和久 記）

沢大学）の各先生が基礎から臨床まで多岐に渡る内容で講演されました。臼井国際奨学金受賞者の Dr. Nguyen Thanh Binh（東京医科歯科大学）は毛包幹細胞の色素幹細胞を維持する仕組みについて講演されましたが、研究の一端は全国紙の新聞にも掲載されています。特別講演は東京医科歯科大学、循環器内科教

授、磯部光章先生にお願いしました。磯部先生は日本における高安病研究の第一人者であり、数多くの臨床研究を報告されています。講演はTakayasu arteritis up-to-date: Clinical management and researchという演題で高安病の最近の臨床成績を詳細に話して頂きました。今後

の臨床に直結する内容であり、我々臨床医にとっては大変貴重な講演内容でした。高安賞、白井国際奨学金受賞は、大学院研究者とくに海外からの留学生にとりまして、このうえない励みとなっています。実際、多くの素晴らしい人材が金沢大学から輩出され、本学が東アジアの医

学研究の中心となっていることを実感させられるシンポジウムとなりました。シンポジウムを盛況の内に終わることができましたのも、関係各位の多大なご協力のお陰でございます。改めて御礼申し上げます。

(臓器機能制御学 山岸 正和 記)

第十五回

ステロイドホルモンおよびホルモンと癌に関する国際学会

平成二十四年十一月十五日から三日間、石川県立音楽堂にて第十五回ステロイドホルモンおよびホルモンと癌に関する国際学会 (International Congress on Hormonal Steroids and Hormones & Cancer) を開催させていただきました。この国際学会は世界的内分泌学者のLabrie教授が設立され、二年毎に世界各地で開催され、ステロイドホルモン並びにホルモン依存性癌に関する研究をテーマに最新知見を発表する場となっており、ノーベル賞受賞者など世界的に著名な研究者が参加するレベルの高い学会として評価されています。

今回の組織委員長である並木も本学会で招待講演を行うなど主要メンバーでしたが、Labrie教授から日本開催を打診されました。我が国では食生活の西欧化に伴い、乳癌、前立腺癌など西欧で罹患率の高いホルモン依存性癌が急増しており、メタボリック症候群を代表とするステロイドホルモン関連疾患も増加し、国民の健康に深刻な影響を及ぼしています。このような状況下で、我が国で本国際学会

を開催することとは、上記疾患の研究・診療の進歩に寄与するのみならず、我が国の研究に対する国際的評価の向上に繋がると確信し、日本開催を承諾し、開催地を国際観光都市の金沢にしました。

Plenary lectureはER β (エストロゲン受容体 β) をクローニングしたGustafsson先生やAR (アンドロゲン



受容体) をクローニングしたChang先生などノーベル賞級の著名な先生にお願いしました。また、副腎、神経ステロイド、骨、生殖、内分泌攪乱物質などステロイドホルモンに関する研究、並びに前立腺癌、乳癌、子宮癌などホルモン依存性癌に関する研究のSymposiumでは、世界各国のエキスパートに最近の話題を発表していただきました。また、百三十を超える一般演題でも各国の研究者に最新の研究成果を発表していただき、ステロイドホルモンに関わる研究・診療の進歩に寄与できたかと考えております。

金沢城五十間長屋で行ったWelcome partyでは中村信一学長に歓迎のご挨拶と金沢大学の歴史をお話いただきました。また、医学類の学生五人 (ハモラ内科、写真) によるアカペラは大好評でした。ANA Crown Plaza Hotelで開催したGala dinnerでは、山野之義市長に歓迎の挨拶と金沢市の歴史をお話いただきました。金沢の秋を満喫していただきながら、国内外の著名な先生方との交流を深められたと存じます。

最後になりましたが、今回の国際学会にあたり多大なご援助を賜りました、金沢大学医学部泌尿器科学教室同窓会および十全同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。(国際学会組織委員長 並木 幹夫 記)

平成二十四年十全同窓会会員名簿刊行

名簿は平成二十三年度、二十四年度会費納入の方にのみ発送いたします。

本号に会費払込用紙を同封いたしております。

未納の方は至急お納めくださいますようお願い申し上げます。

医学類における新しい研究者育成プログラム

—メディカルリサーチトレーニングプログラム—

医学類教育委員会委員 多久和 陽

医学部の使命の一つである「研究者育成」が今や大きな危機に見舞われています。以前は、ごく少数ではあったものの医学部卒業後に直ちに大学院に進学し、基礎医学研究を開始する学生がいました。また、臨床を経て、基礎医学研究に入ってくる方もいました。この進路を選択した卒業生の多くはその後、大学医学部や研究所で医学研究・教育に従事しています。全国八十校の医学部の基礎系教員は、毎年定年などで約百五十〜二百名が退職するといわれていますので、同数の新任教員の補充がなければ医学部基礎系教室の教育・研究は立ちいかません。医学部以外の出身の教員とともに、上述の少数の医学部卒業生が、これまでの医学部基礎医学教育と研究を支えてきました。ところが、臨床研修制度開始後、医学部卒業後大学院に進学して基礎医学研究に進む学生は、金沢大学ではほぼ皆無になりました。一部の有力大学では状況は幾分ましですが、他大学でもおしなべて似た状況であり、全国的な問題ととらえるべきです。

言うまでもありませんが、医学部基礎系教室の後継者や臨床教室で研究に従事する医師の減少は深刻な事態を招きます。第二の山中伸弥教授の出現も難しくなるかもしれません、それよりも重大なのは、医学部における医学研究が徐々に低調になっていくと、教育も魅力に乏しくなり、学生を惹きつける力を失うのではない

支援のもとで、堀修教授（三解剖）、若山友彦准教授（二解剖）、山本靖彦准教授（二生化）と私が本プログラムの世話人教員をつとめています。

MRTプログラムの概要を図に示します。本学医学類ではもとより三年生の一、三月に、学生が数人のグループに分かれて各研究室に配属され、教員や大学院生とともに実験に参加する「基礎研究室配属」という科目があります。学生の中には、研究がどうしてもなくなり、「基礎研究室配属」終了後も研究室に通い続けて研究を継続する学生がこれまでも毎年二〜三人いました。中には、研究成果を論文としてまとめるところまで成果が上がった学生もいました。MRTプログラムは、いわばこの「基礎研究室配属」を卒業するまでの長期にわたって行うものです。まず一〜二年生を対象とした「メディカルサイエンス入門」というセミナーを開催し、医学類教員による医学研究の紹介を行います。この間、学生は本プログラムに参加している約四十教室の中から自身の興味に応じて研究室を自由に選びます。研究室決定後は早速、授業の空き時間や夕方以降、休假期間を利用して、研究に参加します。こ

メディカルリサーチトレーニング(MRT)プログラムの概要

学年	1	2	3	4	5	6
医学類正課	教養科目	基礎医学科目 解剖学 薬理学 法医学 生化学 微生物学 衛生学 生理学 病理学 公衆衛生学 など	臨床医学科目 講義 CBT	臨床実習		国家試験
MRTプログラム		メディカルサイエンス入門	研究室に所属し研究に参加	リサーチゼミ・英語コミュニケーションゼミ		

れは、医学類の正式科目の勉強と並行して行いますので、多少忙しくなりますが、各自マイペースでやってもらえばよいと考えています。また、ゼミナールや論文講読会にも参加し、最先端レベルの研究の知識を吸収できます。本プログラムは医学類の正課の授業とは異なり単位認定をせず、あくまで学生の自主的な参加に委ねています。MRTプログラムについては、医学類ホームページにプログラムの詳細や活動実績が掲載されていますので、ご覧いただきたいと思っています。

先行している他大学では、MD研究者育成プログラムへの参加希望学生は従来のMD-PhDコースに比べてはるかに多く、定員を設けて参加学生を選抜している大学もあるようです。東大、京大、阪大、名大は、これまでに学生による研究成果の合同発表会（リトリートと呼びます）を二回共同開催しています。この活動は、医学研究者を目指す同世代の医学部学生のネットワークの形成に大いに役立っているとのこと。

このプログラムを通して、学生の段階から医学研究の面白さや大切さを理解し、将来、基礎医学研究者や研究医となり、次世代の医学研究、医療のリーダーとして活躍し、二十一世紀のわが国の医療がよりよいものになることを期待しています。

病院紹介

独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センター

△病院概要▽

当院は日本三名園の一つである特別名勝兼六園に隣接した旧前田藩家老職の奥村邸跡に建てられています。敷地を囲む長土塀は加賀百万石の武家屋敷の風貌を今に偲ぶ貴重な文化財であり、現代と藩政時代が重なり合う貴重なアートです(写真)。当院のルーツは明治六年に金沢城址に創設された金澤衛戍病院に遡ります。明治三十二年に現在地に移りましたが、昭和十二年には金澤陸軍病院、昭和二十年には金澤第二陸軍病院となり、同年十二月には旧厚生省に移管され国立金沢病院となりました。平成十六年四月には行政改革の一環として国立病院や国立療養所は独立行政法人国立病院機構へ移行することとなり、それを機に金沢医療センターと名を改めて現在に至っています。病床数は一般病床六百一床、精神病床四十八床、標榜診療科は二十三科です。

△政策医療の推進と地域医療への貢献▽

当院は政策医療面での専門医療施設の特徴を明確にする一方で、全国百四十四の病院ネットワークとして機能する独立行政法人国立病院機構の一員として「高度総合医療施設」に位置づけられ、教育・研修や情報発信などの役割も担っています。当院では政策医療として特に血管疾患(循環器)とがんの分野に重点を置き、

血管病センターやがん診療部を設置しています。血管病センターは血管を一臓器と見なして全身の血管疾患を総合的に診療するためのユニークな部門であり、センター関連各科の外来や病棟を集中的に配置しています。また最近では不整脈の先駆的な治療にも取り組んでいます。がん診療部は進行がんや再発がんなどに重点を置いた集学的な治療を実施する体制を取り、平成十九年に地域がん診療連携拠点病院の指定を受けたことを機にがん化学療法を行う「外来治療センター」や「がん相談支援室」を開設しました。このような政策医療の推進を支援する仕組みとして臨床研究部が設置されていることも当院の特徴の一つで、国立病院機構のネットワークを活かした治験・臨床試験や多施設共同研究への参加と院内研究助成を行っています。

地域医療に関して、地域医療連携室や開放病床を開設し、平成二十年四月には石川県では初めての地域医療支援病院の指定を受けました。同年五月から地域医療連携ITシステム「百万石メデイねっ」とが稼働しています。また地域災害拠点病院や地域周産期母子センターに指定されています。救急医療では二次救急医療を担当し、小児救急に対して、二交替制勤務による二十四時間体制を整備しました。ちなみに平成二十三年の救急車搬送件数(小児を含む)は二千四百五十四件で二次医療圏で最多となっています。

△「一歩先んじた医療の実践」をテーマに▽

当院の位置する石川中央医療圏には多くの医療機関が集中し、競合する面も多く、その中で当院の存在意義を明確にする

ためには提供する医療内容の特徴を打ち出すこと、すなわち他施設との差別化ないし棲み分けを明確にすることが各診療科に共通する重要な課題と考えて、一歩先んじた医療の実践を基本テーマに掲げています。がんや血管疾患の分野に限らず、全ての診療科や部門が一歩でも他に先んじた医療を提供することを目標としています。まだまだ不十分ですが、循環器科の不整脈治療、消化器外科の金沢大学病院との密接な連携や整形外科における手の手術、耳鼻咽喉科の小児難聴外来や県から委託を受けた「いしかわ赤ちゃんきこえの相談支援センター(みみずくクラブ)」の設置、産婦人科の院内助産や院内助産師外来など少しずつ萌芽が見えつつあります。

△最近の動き▽

昨年七月に約十億円の費用をかけ、地下一階地上三階の中央診療棟が完成しました。耐震性や利便性に問題のあった旧放射線治療棟の放射線治療施設やアイソトープ施設、小線源治療室を移設するとともに血管造影検査室や対外衝撃波室、ICUなどをまとめたものです。特に増室した血管造影検査室には北陸初の手術対応型ハイブリッド血管連続撮影装置が設置され、「一歩先んじた医療の実践」例として昨年十二月から稼働しています。

さて、国立病院機構は行財政改革の流れの中、行政刷新会議の独立行政法人改革に関する検討会などの議論を経て、第二期中期計画が終了す

る平成二十六年四月から新しい法人形態へ移行する予定となっています。これまでの法人での医療になじまないルール、たとえば利益処分や人件費管理の問題などから開放されることでより良質な医療を提供できる体制が確立されることを期待しています。

(院長 能登 裕 記)



土塀に囲まれた病院

病院紹介

独立行政法人 労働者健康福祉機構 富山労災病院

△設立経緯と沿革▽

昭和二十年代後半から三十年代にかけて、日本経済の高度成長と共に、労働災害も多く発生するようになりました。労働省（現厚生労働省）では、多発する労働災害に対応するために全国各地に労災病院が必要と考え順次設置しました。

当院は富山県東部の中心の魚津市にあります。天正十年（一五八二年）に上杉謙信勢に支配されていた魚津城を前田利家が攻めていた時に、京都で本能寺の変が起きた。知らせを聞いた利家は急ぎ船に乗り、一気に居城である七尾城に向けて漕ぎ去った。その地に昭和三十三年（一九五八年）五月に建物の一部完成を待って、内科、整形外科、外科、の四十床で仮の開業をしました。昭和三十四年に完成し、耳鼻咽喉科、眼科、歯科の三診療科を加え、当時最新鋭の二百床の病院としてスタートしました。以来富山県東部の中核病院として急性期医療と政策医療を発展させてきました。現在は三百床です。

急性期医療では、平成十八年六月には「核医学PET診断センター」を開設し、平成十九年一月には厚生労働省から「地域がん診療連携病院」に指定され、がん診療に力を入れています。また、政策医療では「労災疾病に対する診療、研究」が行われてきています。労働環境や職場

の変化に伴い多様化する労災疾病に対応するために、平成十二年に「勤労者呼吸病センター」、平成十五年には「勤労者の電話相談」、平成十六年には「勤労者医療総合センター」、平成十七年には北陸で唯一の「アスベスト疾患センター」を開設しました。初代院長は金沢大学第二外科教授を退官された熊奎御堂進先生です。以来、太田五六先生（第二病理学）、廣根孝衛先生（皮膚科学）、渡邊洋宇先生（第一外科学）、三輪晃一先生（第二外科学）が金沢大学から院長として赴任されています。

△現況▽

労災病院は全国に三十四あります。当院の基本理念は「地域の人に信頼される病院になる」です。診療内容は他の公的病院と同様に、二次救急、癌、心筋梗塞、脳卒中、代謝、脊椎、関節疾患などの急性期医療が主体です。同時に労働災害関連の政策医療も担っています。当院は十九診療科があります。魚津市の協力も得て、PET/CT、ESWL、リニアック、などの高額機器を一通りそろえ、高度医療にも対応しています。昨年度の救急車搬送人数は約千三百名で、紹介患者ともども年々増加しています。現在の病床利用率は八十二%で平均在院日数は十五日です。一方、耳鼻咽喉科、産婦人科、小児科の常勤医の不在など、目下の課題はやはり全体的な医師不足です。

個人の能力向上に関しては、医師、看護師を始めとした職員は本部主催の各種研修会や会議に参加します。全国の他大医学出身者や職員との交流、情報交換、勉強会を通じて、質の向上が図られています。

。「異なる発想やシステム」に刺激され、あるいは落ち込むことがあります。他に、臨床研究奨励、各種資格取得への援助、内地留学、などのキャリアアップ支援制度があります。また、子育て中の女性医師を対象とした「短時間勤務正規雇用制度」を準備しています。院内では、キャンサーボード、医師会との症例検討会、消化器病カンファレンス、北陸がんプロのテレビ会議による症例検討会参加、など積極的に活動しています。診療各科の垣根を低くして、機能的な診療を心がけています。また、五年前より、医療の質の向上や経営改善のためにバランススコアカードを使用しています。

当院は平成二十六年度から国立病院機構と同時に、厚労省関連の新しい独立行政法人に移行します。それに伴い、経営の自由度の拡大による機能の充実が期待されます。

△病院新築に向けて▽

三年後の新築病院完成（敷地内）を目指しています。免震構造を採用した災害に強い、安全・安心な建物と医療を実現するべく、職員のモチベーションが上がっています。新病院は延べ床面積が約二万一千平米です。六階までが診療関連の建物で、七階に屋上施設が設けられる予定です。診療面では、地域初期救急センターを含む広い救急室を設けます。病棟は、重症患者と救急患者を扱う病棟（HCU機能を持つ）、消化器、循環器、脳卒中、運動器などの機能別病棟にして、簡易無菌室など適切

な設備・構造に配慮し、診療の効率化とレベルアップを図ります。全病室から立山連峰が富山湾が見え、患者さんに安らぎをもたらすでしょう。莫大な資金が投入されるとはいえ、建物は道具です。「仏作って、魂入れず」との諺にもあるように、人が大事です。医師、看護師をはじめとした職員が気持ちよく働くことができなければ、患者さんを力づけられませんが。皆様のご指導、ご支援をお願いする次第です。

（院長 木谷 隆一 記）



教室だより

経血管診療学(旧放射線医学)

当教室は一九一七年四月に小池才一の下に創設された石川県金沢病院理学診療部を前身とし、その後金沢医科大学への移管を経て、一九四五年三月に平松博を初代教授とする理学的診療科として発足しました。一九四九年に金沢医科大学が金沢大学医学部に包括され、当教室は診療科名を放射線科・教室名を金沢大学医学部放射線医学教室と改称しました。一九七二年にはRⅠ部門が核医学講座として分離独立しています。一九七五年三月に高島力が第二代教授に就任し、一九九九年八月に松井修が第三代教授に就任しました。二〇〇一年の大学院大学化に伴い金沢大学大学院医学系研究科循環器医学専攻血管病態制御学講座経血管診療学分野となり、さらに大学院組織の改組により二〇一二年四月からは医薬保健学総合研究科となって現在に至っています。

大学病院では放射線科・放射線治療科として画像診断全般(核医学診断を除く)、interventional radiology (I V R) 全般(心臓、脳領域を除く)、放射線治療全般を担っており、その診療実績は国立大学病院で常にトップレベルです。放射線科に集中化させた欧米式の放射線治療システムの構築に古くから努めており、放射線治療について病院全体のチーム医療が確立されています。これは教室員が多数在籍する北陸三県の基幹病院にも浸透しており、北陸の放射線診療を世界レベルに維持していることにつながっています。当教室では、まず患者さんのために世界レベルの診療を提供すること最大の目標にしており、そのために必要新しい診断法・治療法の開発や日常診療における問題点を解決

するための研究を行っています。

画像診断

①画像診断…松井教授を中心とする肝画像診断に関する研究は当科の中心的研究テーマであり、経動脈性門脈造影下CT (CTAP) および肝動脈造影下CT (CTHA) による肝血流動態画像解析を行うことで多くの成果を上げてきました。多血性肝癌が多段階的に発癌することを見だし、その多段階発癌に伴う結節内血行動態変化の概念を確立しました。この概念は世界中で広く受け入れられ、肝癌の早期診断と治療法の開発に大きく貢献しています。近年は肝機能性MRI造影剤であるGd-EOB-DTPA (EOB) の研究にも力を注いでおり、北尾助教らは分子病理学的手法を使用してEOBの造影機序を説明し、EOB造影MRI肝細胞相画像が多段階発癌のマーカーとなることを明らかにしました。保健学類の小林准教授らはEOB造影MRIと血管造影下CTの所見より前癌病変の癌化の予測を行っています。病理と画像の対比に基づく肝腫瘍性病変の鑑別診断の研究も長年にわたって行っており、最近では小坂助教らが細胆管癌に関する研究成果を発表しています。

②胆・膵画像診断…蒲田准教授を中心に膵癌の早期発見と進展に関する画像診断の研究を行っています。近年では、膵癌の肝転移が他の消化器癌の肝転移と異なる画像所見を呈することを



明らかにしたほか、膵頭部癌の神経叢浸潤のCT所見の解析が海外でも高い評価を受けています。

③乳腺画像診断…保健学類の川島教授を中心に高磁場MRIを用いて正確な乳癌の進展度診断や術前化学療法の効果判定を目指す研究を行っています。

④中枢神経画像診断…植田講師を中心に臨床各科と共同で高磁場MRIを用いた研究を行っています。フアンクショナルMRIや脳内トラクトグラフィに関する研究、MRIを用いた動脈瘤術後の非侵襲的評価法に関する研究、MRスベクトロスコピーを用いた脳腫瘍診断に関する研究などが進められています。

⑤がん関連疾患の画像診断…井上医員を中心に本疾患の画像病理学的解析を行っており、これまでに肺、動脈周囲病変、神経周囲病変の画像所見を明らかにしてきました。さらに症例の蓄積を進め、全身性疾患としての本疾患の病態を明らかにすることを目指しています。

I V R
I V Rの新しい技術開発や安全性向上のための研究を行っています。

①肝細胞癌に対する肝動脈塞栓療法…松井教授らが開発したマイクロカテーテルを用いた亜区域塞栓療法は肝癌の局所再発率を劇的に

減少させ、世界の標準的塞栓療法として広く普及しました。近年では、南助教らにより新しい液体塞栓物質とマイクロバルーンを用いた実験的研究も行っています。また、肝細胞癌などの多血性腫瘍や動脈奇形の塞栓術における球状塞栓物質の臨床応用について、本邦での主導的な役割を担っています。

②ステントグラフト治療…松井教授が開発したMⅠKステントを用いて、黎明期よりこの治療に取り組んできました。眞田講師を中心に治療および研究を進めており、光造形技術を用いた血管モデルによるシミュレーションの研究、薬剤溶出型ステントグラフトの実験的研究、血栓飛散防止の補助デバイスの開発などを行っています。

③経皮的椎体形成術(PVP)…本邦においていち早くこの治療を導入し、CT透視を用いた手技を開発してきました。小林元講師(現・石川県立中央病院)と香田助教を中心に有痛性悪性骨腫瘍に対する全国多施設共同臨床試験を行い、本治療の保険収載にも寄与しました。

放射線治療

①呼吸移動性腫瘍に対する呼吸停止下回転型強度変調照射法…高仲准教授を中心に、呼吸性移動の大きい腫瘍に対し呼吸停止下でIMRTを適用させるための照射法の開発と臨床応用を行っています。

②前立腺癌に対する小線源治療併用強度変調放射線治療…熊野助教を中心に、小線源治療と外照射としてのIMRTを併用して、前立腺癌に対するより適切な放射線治療法を追究する研究を行っています。

放射線科・放射線治療科は常に臨床各科と連携しながら医療レベルの維持・向上に寄与するのが務めです。今後とも診療・教育・研究に邁進し社会的役割をしっかりと担っていきたいと考えておりますので、益々の御指導・御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

(香田 渉 記)

教室だより

血管分子生物学(旧生化学第二)

研究分野の沿革

昭和三十九年生化学第二講座が久野滋教授を初代講座主任として開設しました。平成二年久野教授は定年退職され、同年より現在の山本博教授に主任を引き継がれました。平成十三年大学院部局化に伴い教室名が血管分子生物学研究分野に変更され、平成二十年医学系E棟五階に移転しています。山本博教授着任後教室人事として、平成八年細野隆次講師の金沢大学医学部保健学科教授、平成九年金子二久講師の金沢女子短期大学教授、平成十八年米倉秀人助教授の金沢医科大学教授、平成二十年山岸昌一講師の久留米大学教授、平成二十四年渡邊琢夫准教授の金沢学院短期大学

教授就任がありました。現在は、教員三名、今年からの特任教員一名、事務補佐員一名、大学院生三名、学外・学内共同研究員三名、学部・学類学生八名が所属し、教育及び研究を進めています。

研究の紹介

現在の教室では教室の名称にもありますように血管を中心とした様々な生理的あるいは病態機構を、生化学・分子生物学・細胞生物学・実験動物学的手法を用いて研究を展開しています。



一、グリケーション(糖化反応、メイラード反応)による病態形成とその防止
ヒトの生命活動に必須なグルコースなどの還元糖のアルデヒド基とタンパク質のアミノ基は非酵素的に反応することが知られています。このような現象はグリケーション (glycation) と呼ばれ、タンパク質以外にも核酸、生体膜脂質にも生じる非酵素的糖化反応です。別名メイラード反応とも呼ばれ、一九一二年フランスの食品科学者Maillardが世界ではじめて非酵素的なタンパク糖化反応を報告したことに由来しています。このような反応による不可逆的な生成物が後期糖化反応生成物 (advanced glycation end-products, AGE) です。タンパク質翻訳後修飾、老化、糖尿病血管合併症、動脈硬化、アルツハイマー病など様々な生命現象に関わり生物学的観点からも重要と考えられています。酵素を使って糖鎖を付加するようなグリコシレーション (glycosylation) とは全く異なる反応です。具体的には、糖尿病における血糖コントロールの指標として広く実地臨床で用いられているHbA_{1c}は赤血球ヘモグロビンのβグロビン鎖に生じる早期グリケーション産物です。高血糖によって生じるグリケーションは糖尿病診断マーカー、合併症予知マーカーとして広く認知されています。さらに、体内に蓄積するAGEの少な

くとも一部は食事由来つまり食品に由来する

ことがわかってきました。グリケーションの反応機構とその防止手段の開発、食品由来AGEは生体にとってどのような影響を与えるのかを研究テーマとしています。また、線虫 (*C. elegans*) をモデル動物として用いた寿命研究も同時に行っています。このように、この後に紹介しますAGE受容体の研究を含め、当研究室はグリケーションの世界を牽引し、平成二十一年十一月には山本博教授が金沢で第十九回日本メイラード学会を主催され、平成二十五年三月にはハーバード大学医学部ジョスリン糖尿病センターでの招聘講演、さらに平成二十七年八月日本での国際メイラード学会開催にも積極的に関わるようになっていきます。

二、RAGE (receptor for AGE) に関わる疾患・病態とその防止機構の開発

前述のAGEを認識する細胞表面レセプターとして見出されたのがRAGE (receptor for AGE) です。現在では、RAGEは単なるAGE受容体としての役割だけではなく、自然免疫に関わる生物学的にも重要なパターン認識受容体と理解されています。これまでにマウス遺伝子改変技術を駆使して、RAGEが糖尿病合併症とくに糖尿病腎症の発症・進展に原因に関わることを証明してきました。その他にも、RAGEがグラム陰性細菌の膜構成成分であるリポポリサッカライド (LPS) のシグナル伝達受容体であること、2型糖尿病におけるβ細胞疲労に直接関わることを、また、がん転移にも関わることを明らかにしてきました。さらに、RAGEはアポトーシス細胞の細胞表面に表出するフォスファチジルセリンを認識し死細胞の処理に関わること、虚血性脳血管障害・脳機能障害、脂肪細胞分化や肥満、粥状硬化病変形成、肺線維症、骨粗鬆症、糖尿病における皮膚の血管新生障害にも関与することとを共同研究によって報告してきました。

また、RAGE遺伝子のRNAスプライシングバリエントである内在性分泌型RAGE (endogenous secretory RAGE, esRAGE) を発見し、その測定ELISAキットを企業と共同開発し上市しました。現在では、esRAGEは糖尿病合併症発症・進展のリスク予知や治療上有用なバイオマーカーとしてのみならず、アルツハイマー病、統合失調症、肺癌や肝癌、骨軟部肉腫の病態マーカー、さらにはesRAGEが高いことが長寿の指標になるなど臨床的にもその価値が評価されています。このような背景の下、RAGEを細胞膜上で瞬時に切断し可溶性のデコイ型RAGEに変換する薬剤の開発や、スプライシングの調節によるesRAGEの分泌促進など臨床応用実現に向けても努力を重ねています。

三、組織幹細胞・がん幹細胞と病態形成メカニズム

骨髄由来の血管内皮前駆細胞 (endothelial progenitor cells, EPC) は血管内皮を正常に保持する機能的役割を担っています。マウス糖尿病におけるEPC変化を詳細に調べることで、脾臓におけるEPC障害が血管内皮傷害に関与するであろう新理論を提唱しました。また、機能解剖学教室との共同研究で、内臓脂肪欠損のモデルを用いた白色脂肪幹細胞の発生、遊走、維持、分化のメカニズムを、整形外科教室との共同研究で、骨軟部肉腫のがん幹細胞の発生メカニズムを追及しています。

おわりに

研究の成果を通じて社会に貢献していきたいと考えています。今後とも同窓会員の皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願ひ申し上げます。

(山本 靖彦 記)

会長報告

同窓会からの寄附に対し感謝状が贈呈される

兼ねてから「医学系図書館改築にともなう什器類の整備に係わる予算の不足分三千万円を十全同窓会に寄附していただきたい」との要請が柴田附属図書館長より寄せられており、山本医薬保健研究域長、松井医学系長、井関医学類長、加藤十全同窓会理事長の間で協議が重ねられた結果、同窓会としては新医学図書館の貴重書室および多目的スタジオに「十全記念」という名称を冠すること、本来医学系の所蔵でありながら自然科学系図書館に分散していた貴重図書を医学系図書館に返還してもらい、貴重書室に設置することを条件として、三千万円を寄附することに決定した。

さる十一月二十一日、その寄附に対する感謝状の贈呈式が本部事務局特別会議室で施行された。出席者は同窓会より佐藤会長、加藤理事長、本学関係者として中村学長、櫻井理事、古川理事、柴田館長、横田医学図書館長、井関医薬保健学域長、山本博医薬保健学総合研究科長、山本健医学類長の計十名であった。

中村学長より佐藤会長に感謝状が授与されたあと(写真)、今後の図書館の建築構想、運営のあり方、利用の展望などが話し合われた。特に「十全記念貴重資料室」と「十全記念スタジオ」の間の壁に、以下の謝辞を刻んだ銘板を設置することが約束された。

「医学図書館の貴重資料室及び多目的スタジオの設備は、金沢大学医学部十全同窓会の篤志により整備したものである。

ここに謝意を表すとともに、両室に「十全」の名を冠して、「十全記念貴重資料室」および「十全記念スタジオ」と称し、未永く記録するものである。平成二十五年三月吉日金沢大学」。

医学図書館の増改築終了後、以下の資料が貴重資料室に配架されることになっている。

洋書約五千冊(平成十七年から自然科学系図書館にて保管)、和装本約千七百冊(仮移転のため平成二十三年九月から自然科学系図書館にて保管)、以上の中には以下の貴重な本が含まれている。レーゼ「昆虫自然史」(全八冊)、オーデマン「オランダ野草図鑑」、シーボルト「日本動物誌」I、IV、Köhler's, Medicinal Pflanzen I、III
会員諸兄の活用を期待したい。

(佐藤 保 記)



支部だより

静岡支部

平成二十四年十月六日静岡駅前センチュリーホテルを会場に二十四年度十全同窓会県支部総会が開催された。本年度担当の東部幹事、加藤政利、片桐浩久両先生の司会のもと十八名のご参加を戴きました。

本部より帰国直後の御多忙のなか中村信一学長先生をお招き致しました。

最初に、中村学長より本学のルーツの歴史的事実のお話や、開学百五十年祭の行事等に付きまして詳しくご説明を戴きました。大学運営が厳しくなる情勢ではありますが中村学長の指揮のもと本学が増々発展する様願っております。

続いて肛門外科四十五年の実績により一昨年大腸肛門外科学会の全国学会を開催された松田保秀支部長先生より「肛門疾患の最近のトピックス」についてご講演を戴きました。

その後出席者のスピーチをいただき盛会裏に会を終了出来ました。

来年は中部地区の担当で開催される予定であります。

ご出席下さった先生方は左記の通りです。(敬称略)

本部…中村信一学長、西部…柿沢紀夫(昭和四十一年卒業)、松田保秀(昭和四十三年卒業)、岡井高(昭和五十二年卒業)、東部…加藤政利(昭和五十四年卒業)、梅原靖彦(昭和五十八年卒業)、片桐浩久(昭和六十二年卒業)、藤田倫匡(平成十一年卒業)、中部…竹内正和



(昭和二十四年卒業)、水野洋一(昭和四十一年卒業)、佐野勉(昭和四十四年卒業)、佐野三枝子(昭和四十四年卒業)、東茂樹(昭和五十二年卒業)、諏訪英行(昭和五十四年卒業)、石神直之(昭和五十五年卒業)、大場範行(昭和五十八年卒業)、内田律子(平成九年卒業)、土屋和弘(昭和四十四年卒業) 各先生方。
(土屋 和弘 記)

京都支部

昨年十月二十日(土)六時から八人の参加者があり、今回は趣向をかえて、幹事の小野聡先生の発案で、京都先斗町のイタリアンレストラン「LUNCAMO(ルンガモ)」を貸り切って開催された。

金沢大学医学部創立百五十周年記念式典等への出席の報告をした後、現在、京都府の舞鶴市長を務めている昭和五十一年卒業の



多々見良三先生の乾杯の音頭で宴会の幕を開けた。

多々見良三先生は昨年の十全同窓会の本部総会の各支部の近況報告でも伝えたとおり、舞鶴市の医療改革をはじめ若狭原発の隣接地としての対応などテレビでもよくお顔を見るのですが、本当に多忙でよく頑張っておられと、京都支部の会員みんなが応援しています。

また、昭和四十九年卒業の桑原正喜先生は滋賀県の草津総合病院の院長から理事長になり、経営面からすべてのことを任せられ本当に大変な様子です。いろいろ苦勞話を聞かせてもらいました。京都に住所があるので毎回出席してくれそうです。ありがたいことです。

そして、昭和四十一年卒業の若泉悟先生は京都府保健協同組合の理事長をしていて多忙な日々です。僕たち開業医の経営に関する、例えば医療廃棄物処理などいろいろ面倒をみてもらって感謝しています。

昭和二十九年卒業の中村晋先生は京都支部を再興された方で、今もお元気に診察しておられ、毎回出席してくださいませ。

会和やかに年齢をこえて世相談義から趣味の話などにぎやかに盛り上がり、来年の再会を約して散会しました。

(八田 一郎 記)

能登支部

平成二十二年十月三日に宝達志水町以北の十全同窓会員をまとめ「能登支部」として発足しましたが、十一月十八日(日)に第三回目の総会・講演会・懇親会を開催させていただきました。会員数は百四十六名で、名簿の作成も行い、開催案内をお送りさせていただきましたが、日曜日の貴重な時間である事、遠方でもあることから、残念ながら出席者は十五名に留まりました。会の進行は常務理事の藤岡正彦先生に任じていただき、総会に引き続き、本部十全同窓会監事の中尾眞二教授をお招きして、講演を聞かせていただきました。総会では荒井邦夫支部長の司会のもと、規約の確認、役員の交代、会計報告、物故会員の報告などが行われました。

中尾先生のご講演は、金沢大学医学部および附属病院の整備状況の話を始まり、医学部創立百五十周年記念事業のお話、学生・研修医の実情などについて詳しいお話をいただきました。また、中尾先生のご専門である血液内科のお話として、骨髄移植、ミニ移植などのお話もあり、固形がん治療にも貢献していることが示されました。また、中尾教授の



お師匠である旧第三内科初代の服部絢一教授は骨髄移植を始められて、成功例を見出し、「不治」の病を「治した」時の喜びは無限に近いと言言葉を残されたと話されていました。医師としての求めていくべき姿を物語っているようで、感銘を受けました。

続いて懇親会に移りましたが、中尾教授を囲み、荒井邦夫支部長の挨拶、佐原吉博先生の乾杯で和やかに懇親会が始まりました。中尾教授を入れて十六名でもあり、アットホームな雰囲気でも話し、出席者それぞれの近況報告など楽しく聞かせていただきました。最後は櫻井秀明先生から閉会の挨拶をしていただき一本締めで会を閉じさせていただきました。日曜日昼のひと時を和気あいあいと有意義な会を持つことが出来、次年度も

同じように開催していきたいのだと感じた次第です。

(相談役・川口 光平 記)

クラス会

而立会六十周年記念クラス会 (昭和二十七年卒業)

昭和二十七年卒業(而立会)の六十周年記念クラス会について、蒔 昭三氏、織田邦夫氏、竹田亮祐氏、廣根孝衛氏、道下忠藏氏と小生が世話人となって何回か打合せをし、一八六七年の創業以来、百四十年以上の歴史をもつ伝統的な日本旅館浅田屋(金沢市十間町)で、而立会六十周年記念クラス会を平成二十四年七月七日午後六時より開催することとしました。くしくも当日は母校の金沢大学医学部創立百五十周年記念式典及び祝賀会が午前十時から十全講堂で行われ、そこで而立会のメンバーと顔を合わせる事が出来ました。

当日浅田屋で午後五時から受付を開始し、クラスメート十五名と同夫人四名の計十九名が参集しました。同五時半から記念写真撮影を行い、同六時から高砂の間で宴会となりました。宴会に先立ち、世話人の竹田亮祐氏から挨拶があり、祝宴に入りました。クラスメート全員八十歳を越えており、足の不自由な方もおられ、座椅子その他座りやすいよう浅田屋で色々工夫していただきました。クラスメート各人お酌し合い、近況を語り合ったり、健康状態を述べ合ったりしていました。而立会のクラスメートも卒業時



八十四名であったものが、而立会六十周年の時には三十六名（その後、大溝和夫氏が亡くなられて三十五名）となり、淋しくなりましたが、宴会では皆さん元気に談笑し合っていました。

宴酣の時、世話人の廣根孝衛氏の発言で、「二、今後は特別の動議がない限りいわゆる而立会総会が行わない。二、会員逝去に際しての哀悼は弔電のみをもってする」を申し合わせました。あとで世話人の竹田亮祐氏から「而立会通信は適宜おとけますが、通達事項があり次第、出来ればe-mailで送信して欲しい」との追加がありました。

一通り料理も終って、皆さん三三五五浅田屋からの引き出物として贈られた忠田敏男著「参勤交代道中記」加賀藩史料

を読む」を携えて宴会場を退出されました。

当日の出席者十九名は次のとおりです（敬称略）

筋 昭三、梅崎 伸、同夫人、織田邦夫、太田 昇、関 一夫、竹田亮祐、橘 武彦、同夫人、恒元 博、同夫人、富田喜一郎、長林勝彦、同夫人、廣根孝衛、船崎嘉一、前田昭治、道下忠藏、山口成良（山口 成良 記）

解剖遺體之墓を詣でる （昭和三十二年卒業クラス会）

生憎の雨に見舞われたが、加賀市片野の鴨池にも劣らぬ鴨の飛來する霜月の柴山潟湖辺の佳水郷で、平成二十四年十一月十七日にクラス会が催された。蟹の解禁となり、食膳には加能蟹をはじめさまざまな郷土食が用意された。寄る年波と病には勝てず、足腰の不便さに座位もままならぬものも少なからず、畳の上の座布団に坐するもの、低めの座椅子に腰掛けるものなどさまざまな宴の席となった。各自の近況報告では、八十年の年輪を重ねた味わい深い話が延々と続出し、幹事は時間調整を気にして、簡潔にして貰うよう苦勞していた。ビンゴゲームそのものは代わり映えしないが、景品が、五郎島金時、加賀蓮根、ローマ法王にも献上された神子原米、本物輪島塗の箸など、すべて石川県特産品とあって、金沢で過した大学学生時代の香りを持ち帰ることとなる。歳相応の五体満足ながら参加できる幸せを感じつつ、旧交を温めること深夜に及んだ。



翌日、金沢へ歩を進め、金沢城辺の白鳥路に金沢三文豪として、泉鏡花、徳田秋声、室生犀星の三人の彫像が並ぶが、その一人の秋声記念館を、浅ノ川河畔に訪れる。図らずも当日は秋声忌とあって、数年前に作られたものではあるが秋声記念誌や絵はがきを土産として貰えた。

その後、小雨そぼ降る中、卯辰山に金沢大学解剖遺体の墓に詣で、往年の解剖遺体に感謝し、手を合わせる。晩秋の墓地は落ち葉が積み重なり、雨で濡れた風情の中、一段と墓石の重さを感じさせる。墓石に刻まれた遺体名は、風雪でかなり崩れ判別し難くなっているものもある。横に建立されている記銘碑は、漢文で書かれ、末尾に明治十六年とあるのを、辛うじて判読し、改めて敬意を表する。

金沢市保健所近くの招龍亭で中華料理の昼食を摂る。昨夜のクラス会に参加で



きなかつた小田島がこの午餐会？に駆け付ける。新谷の提案に従い、来年は東京で、山口、西川をはじめ都内に在住の諸士が世話役となって開催することとなる。

当日参加者は、安達弘章、石丸幹夫妻、加子隆樹夫妻、菊地誠夫妻、新谷博之夫妻、杉山正彦、田崎喜昭父娘、西浦幸男、西川慶繁、西正美、福山裕三、松田嘉之夫妻、宮崎誠示夫妻、安田義顕、山口佳晴（介助者同行）の二十三名と、昼食に出席の小田島肅夫の二十四名である。なお、参集日直前の十一月十五日に、突然、当初参加を表明していた田中勤也の訃報に接する。昨年のクラス会以降の逝去者、田中勤也、豊田務、前川誠及び宮田浩と四名の冥福を祈った。（文中敬称略）

（文責西、写真石丸）

「さんぶ」会 (第五十回) (昭和三十五年卒業)

昭和三十五年卒業の同窓会の名称をさんぶ会と呼び、昨年十月二十七日(土)、二十八日(日)の両日、五十回目のさんぶ会が名古屋マリオネットアソシアホテルで開かれ、翌日は明治村並びに名鉄犬山ホテル内の有楽苑・如庵観光が行なわれました。参加者は会員・同伴者四十名が参加し、皆様高齢にもかかわらず、一人のキャンセルもなく、万障繰り合わせてご参加いただき、本当に有難く思いました。会員のお一人に車イスで、奥様付添いで参加された方がありました。奥様が同窓会場が名古屋駅に続いているから



参加できましたと述べられ、このホテルを選んで良かったと思いました。同窓会は昨年度逝去された会員の黙祷に始まり、金沢大学医学部の現況及びさんぶ会の会計報告が行なわれ、その後、五十回目の記念講演として、元明治村建造物担当部長、西尾雅敏氏の「明治村で金沢を想う」の話がありました。柔らかい口調で、ユーモアをまじえた話ぶりに皆様魅了され、氏の作られた葉が大変参考になりました。同窓会もピアノソートの奏でる懐かしの映画音楽でムードが盛り上がり、会員の方々の謡、歌、近況報告や全員による寮歌合唱で、時の経つのも忘れ、終始和やかな楽しい雰囲気でした。次回の誘致演説、閉会の辞で、同窓会は終了しましたが余韻納まらず、そのまま二次会へ持ちこされました。翌日は生憎の雨模様でしたが明治村での旧帝国ホテル前の集合写真はうまく撮れ、限られた見学時間の中で、熱心なボランティアガイドの御蔭で、金沢ゆかりの建物すべて見学出来、皆様満足された様でした。犬山ホテルのレストランでの昼食も、長良川や国宝犬山城を眺めながらでリラックスされました。有楽苑の国宝如庵の茶室の見学は雨に降られました。ガイドの説明に熱心に聴きいつてみました。その日は犬山祭で、通常なら混雑し、帰りのバスが渋滞する所、雨のため名古屋への帰路はスムーズで思わぬ雨の効用に気づきました。皆様いつ迄もお元気で。又の再会が楽しみです。

五十回幹事 河田・塩之谷・嶋崎・油井・横田

(横田 徳久 記)

昭和三十七年卒業 同期会報告

昭和三十七年卒の五十周年記念同期会が、平成二十四年十月二十日、ANAクラウンプラザホテル金沢に於いて開催されました。

全国から男性二十九名(うち四名が夫婦同伴)、女性一名が集まり、久しぶりの再会に受付も早々に話し込む姿が見られ、早くも会場に熱気が漂い始めました。

開宴の前に、一同揃って記念撮影を行った後、まず物故者への黙祷が行われ、続いて地元金沢を代表して、素谷君が開会の挨拶をのべ、最も遠方の高知より参加された岩崎君が乾杯の音頭をとり開宴しました。

会場には、大谷君推薦のドイツワインコーナーと、加藤(日)君推薦の日本酒コーナー



が設けられ、酒好きにはたまらない企画が用意されていました。

近況報告とスピーチタイムでは、まずこの同期会準備会の事務局を担当し企画を進めてこられた加藤(日)君から、今回の同期会に於いての経過報告と、我々が学んだ頃の金沢城キャンパスの航空写真や、現在整備が進む金沢城公園の写真がスライドで映写され、バックには昔懐かしい蔡じられた遊び「や」や「デンの東」等のメロディーがスピーチタイムの間、流れる心憎い演出がありました。

続いてマイクがテーブルを順番に回り、それぞれに近況が報告されました。退職後は第二の人生を歩む者、家業を次の世代に譲り悠々自適の者、未だに現役として第二線で働いている者など色々ですが、少なくとも出席者は全員健康で元気に余生(?)を楽しんでいる様子がうかがわれました。

最後は大谷君の中締めで二次会はお開きとなりましたが、三三五五流れ着いた二次会でも、夜遅くまで話が尽きることにはなかつたようです。

翌日は九時ホテル発の貸し切りバスで、五十年の間に大きく変貌を遂げた市中的の様子や、金沢城にまつわる尾崎神社やイモリ堀の説明を聞きながら、大学病院へと車を進めました。

病院では、富田病院長が休日にもかかわらず出てこられ、院長室で病院の概略をユーモアを交えて話された後、受付ロビー、新病棟、病棟屋上、特別室、ICUと廻って熱心に説明をして頂きました。さらに、医学部に向かい十全講堂横の資料館で、国内にある四体の中で最も保存状態が良いとされるキンストレーキ人体模型を始め、貴重な保存資料の数々を見せて頂き、校舎前に出て医学部創設百五十年を記念して建てられた第一期生モ

ニュメントや高安右人先生の胸像、ヒポクラテスの木等の説明をして頂きました。休日にもかかわらず出勤して下さり、終始丁寧な案内して頂いた山本学部長を始め事務局の皆様、本当に有り難うございました。

予定時間をやや超過し、再びバスにて金沢城公園に向かいました。

石川門より入城してボランティアガイド「まいどさん」の案内で、晴れ渡った秋空の下、河北門→橋爪門(工事中)→五十間長屋→

学生課外活動支援報告

西日本医科学生総合体育大会

第六十四回西日本医科学生総合体育大会は、代表主管校岡山大学の運営の元に、平成二十四年七月二十八日～八月十七日に渡って開催され、無事閉幕しました。

今回の西医体は天候にも恵まれ、また、交通の利便性や、充実した宿泊施設、熱中症対策が十分に行われていたことなど、日頃の練習の成果を十分に発揮するには申し分ない環境であったと思います。総合順位(二十六位)は昨年に比べ前進することができ、全ての部活が全力を尽くせたのではないかと思います。

このような非常に大規模な大会に出場できるといことは、選手にとつてこの上ない糧となります。また、日々の練習などの過程を通じて様々な面において大変貴重な経験をさせていただきました。こういった私たちの活動にご理解を示し、多大なるご支援を頂きました十全同窓会の皆様方をはじめ、OBの先生方など関係者各位にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

菱櫓と見学しました。年齢の割に健脚の方はかりでしたが、さすがに皆さん半日歩きずくめでお疲れの様子もみえ、バスに乗り金沢駅にて解散となりました。

遠方より参加頂いた皆様に感謝申し上げますとともに、今回は病気や体調不良で参加できなかった方々が快方へ向かわれることを祈念しつつ、五十周年記念同期会の報告といたします。(井口 英樹 記)

来年度も選手一人一人がベストを尽くし、成績向上に向けて更なる努力をして参ります。また、第六十六回大会は金沢大学が代表主管校となり西医体を運営することになっております。今後ともさらなるご支援のほど、よろしく申し上げます。

各部の主な成績

弓道部	男子 七位	女子 五位
団体	男子 二位	
卓球部	男子 二位	
団体	男子 二位	
陸上部	男子 二位	
男子 二位	男子 二位	角 三位
男子 一〇〇m	角 四位	
男子 二〇〇m	角 四位	
男子 四×一〇〇mリレー	三位	
男子 四×四〇〇mリレー	五位	
男子 ハンマー投げ	山田 二位	
男子 やり投げ	宇佐美 二位	
女子 走幅跳	平川 三位	

(第六十四回西医体評議員

医学類四年 後藤 有基 記)

白山診療班活動報告

白山は日本三名山のひとつで、古くから信仰の山としてたくさんの方の登山者を迎えてきました。最近では、七・八月の二カ月間に二万人を超える数の登山者が室堂に宿泊します。日帰りの登山者等をあわせたらその数はさらに倍近くになるでしょうか。わたしたち金沢大学白山診療班は、そんな中石川県の委託によって白山での山岳診療活動を、奉仕活動というかたちで五十年以上の間行っています。山に登っている人々にとつて、山頂に診療所があることによる安心感はとても大きなものではないでしょうか。

今年度の夏山は、とても賑やかな印象でした。多くの先生と学生が診療班に参加してくださり、驚きと嬉しさを感じています。近年の人数不足問題は、診療所から班員がはみ出してしまふ、という嬉しい悲鳴に変わりました。登った学生からは、来年も登りたいという声が多く聞こえており、来年度に経験者として登ってもらえる人数が増えたことを心強く思っています。学生が日程を埋めることで、正班員の先生方もお迎えしやすくなると思いますので、これを機会にますます診療班を盛り上げていきたいです。

白山での経験は長く心に残るものだと感じています。ご一緒させていただいた先生方も白山での思い出をとても懐かしそうにお話してくださいました。何年も前のことでも、一緒に登った仲間のことや、その時何を考えていたか、どんな特別な出来事があったのかをまるで昨日のことのように思い起こされているようで



した。そのようなお話を聞いていると、とても幸せで懐かしい気持ちになりました。このように、学生生活の中でも特別となる貴重な体験をさせていただいているのも、十全同窓会の皆様をはじめ、周りの方々のご協力あつてこそだと感謝しています。来年度もますます良い夏山になりますように。今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。

(医学類四年 盛田 玲奈 記)

立山診療班活動報告

中部山岳国立公園内にある立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高三千mの天上界。年間にして延べ百万人もの観光客が訪れ、私たちはそのような状況下で発生する疾病・事故に対応すべく富山県警察山岳警備隊、山小屋、環境省との連携により医師の無償の診療活動の補助を行っています。臨床の現場を実際に見ることができ、医師を志す者にとっては非常に貴重な場であり、医師の重要性を痛感し、医師の責務の重さを実感します。生活は、雄山から拝む御来光、咲き誇る高山植物、夜空を流れる天の川と夜明けから日没まで自然界の移り変わりを肌で感じて過ごす日々。診療班に六十年の伝統があるのは、山を降りても心の中に忘れがたい情景が数多く残るからだと思っています。

本年度は、再診も多く、去年以上の患者数となりました。体制としては、登山客が多い土日には何れかの診療所に必ず医師がいる環境を作ることができ、多くの学生の協力によりほぼ空きを作ることなく運営できました。診療所には高山病や外傷など様々な患者さんが訪れます。しかし、山の診療所では物資が限られ、治療に限界があるために、山頂に行きたいという希望にもかかわらず、下山の選択肢しかない状況が多々あります。そもそも何故山に登るのでしょうか？昔風に言うと、登山は困難に対する挑戦と言えるかもしれませんが、現在は多様化し、山はいかなる形で愛されてもよい訳で、むしろ、山を愛する気持ちの内容



こそが大切なのではないのでしょうか。最後になりましたが、先輩の医師方をはじめ、活動を支援してくださいます十全同窓会のおかげで今年度も無事に活動を終えることができました。皆様に厚く御礼申し上げます。

(立山診療班代表 医学類五年

堀内 俊男 記)

ACLS金沢活動報告

ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢では、BLS・ACLSを中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っています。BLS (一次救命処置) である心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・静脈路確保と薬剤投与、心電図判読・除細動などといった高度な治療を用いたACLS (二次救命処置) まで幅広く学んでいます。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使って手技練習をするので、より臨床に近い体験ができます。

全国の多くの医学部にACLS部(サークル)があり、それぞれの大学が開くワークショップ(WS)に参加しています。ACLS金沢も毎年WSを主催しており、本年度は八月にWSを開催しました。北陸・東北・関東・東海・関西・四国と、全国から総勢約五十名の仲間が集まってくれました。当日はシナリオに沿ってチームでの治療のシミュレーションを行います。全国からの声に応え、今後も引き続いて開催していきたいと思っています。

WSを通じて私達は多くのことを学んでいます。それは医学的な内容に留まりません。大勢での議論を時間内にまとめたり、参加者の連帯感を高めるためのアイスブレイキングを工夫したり、より効果的に記憶を定着させるためのレクチャーを考えたりしています。パワーポイントに使うフォントから配色、フイー

ドバックに適したホワイトボードの使い方に至るまで、WSでは非常に綿密に計算されています。そうした、普段の大学では学べないスキルを全国の仲間と切磋琢磨できることこそ、このサークル最大の魅力だと感じています。

今後の課題は「学生同士が教えあう」という環境をいかにうまく使えるかです。試行錯誤しつつ、理想の形を追求していきます。そしてこの活動を通して、「蘇生の輪」がより広がっていくことと信じています。

最後になりましたが、私たちの活動を支えてくださる救急部や麻酔科蘇生科、そして十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。

(医学類五年 田口 理恵 記)



Live Aid Kanazawa

Live Aid Kanazawaは、石川県の救急救命率を向上させようと市民の方々にBLS（初期救命救急）を普及するボランティア活動を行っております。

BLSとは人が倒れた際の迅速な救命活動のことを言います。二〇一〇年のAHA（アメリカ心臓学会）のガイドライン改正にもない、病院前の市民救助者による心肺蘇生とその教育・普及の重要性がより一層喚起されていますが、BLSを理解されている方はほんの一握りです。また、二〇一一年の東日本大震災にともない、地域の防災意識が高まっており、BLSに加え、熱傷や出血、創部固定などの応急処置の講習要望を受けることも多くなりました。

このような背景から、本年度も自治体・公民館・保育園・小・中・高等学校・専門学校・高齢者人材センター・消防本部主催の救急フェアなど様々な場所出張講習会を行いました。傷病者発見・心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息時の異物除去・応急処置などの練習、生活の中での予防や注意点・災害に対する意見交流会など、会ごとの特性や年齢層、季節・ニーズに応じて、我々も毎回勉強しながら講習を組むことで、多くの方に大変熱心に参加して頂きました。最近では以前に私共の講習会を受けて頂き、胸骨圧迫やAEDの使い方に慣れている方も見られ、活動の広がりを感じ、とても嬉しく思っています。

加えて、医学類学生を対象にAHAのBLS・ACLSのプロバイダー講習会

を行っており、多くの学生に体系的に練習してもらっています。

依頼があれば、どちらへでも伺います。このような活動が市民への普及、地域連携への一助になることを信じ、今後も精進して参りたいと思います。

最後に、ご指導・ご協力下さる救急部・稲葉英夫教授、そして私共の活動をご理解・ご支援下さる十全同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

(Live Aid Kanazawa 代表

医学類五年 臺藏綾霞 記)



二〇一二年度 医学展開催御礼

医学展も終わり冬の足音が聞こえる今日この頃ですが、十全同窓会会員の諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

十一月三、四日に開催されました二〇一二年度医学展は、初日の悪天候に見舞われたにも関わらず、六千人（前年度約四千人）近い来場者を迎えて盛況のうちに無事閉幕することができました。十全同窓会の皆様方には、医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

今年度の医学展のテーマは「奏・奏・奏1863」としました。これは、私たちが育ってきた金沢の方々と、私たちを育ててくださった先生方と、更には医薬保健学域で学ぶ私たち同士で、医を通したコミュニケーションを奏でることができればといった想いでつけられたものです。また、今年度の医学展ロゴマークは「新芽」をベースにしたデザインとなっております。これは、本年度金沢大学医学部創立百五十周年を迎えるにあたり、伝統を大切にしつつ、ここからまた新たなスタートを切ろうといった意味が込められています。私たちはこのテーマを掲げ、これまでの企画を大切にしつつ、常によりよい医の発信方法について検討し、チャレンジしてまいりました。

今年度の企画では、百五十周年特別企

画として、新しく「解剖企画」を設置したほか、以前よりご好評をいただいております「病院見学」を復活させ、「救急車企画」、「金沢大学医学部百五十年の歩み」、「各科講義企画」といったブースを増設しました。医療をより身近に感じていただけるよう、本年度はより体験を重視した企画を多く設置しました。特に解剖企画では食肉用の動物を使用して、実際の心臓や肺などの解剖を来場者の皆様に体験していただきました。私自身、中学生の時に解剖実習を行ったことは医学部を志すきっかけの一つになったので、これをきっかけに医学に興味を持てる方が少しでも増えればと考えております。

毎年、ご好評をいただいている医学展ですが、学生を中心とした若い世代の興味をなかなか引けていないのが現状です。昨今予防医学の重要性が叫ばれている中で、医学展をきっかけに若い世代に少しでも医療に興味を持ってもらいたいと思いました。そのため、今年は学生らしい要素をより強くし、屋外ステージにご当地アイドルや有名なアカペラグループを招くなどしてステージを充実させたと、ステージ前は悪天候にもかかわらず若い世代を中心に大盛況となりました。ステージを見に来ていただいた方々にとつて、医学展が多少なりとも医療に接するきっかけになったのではないかと信じています。

今年度で復活から六回目となる医学展でしたが、組織編成や資金繰りなどの様々な面において改善すべき点が沢山あります。医学展はこの先どのような方向へ向かうかはわかりません。しかし、私

たちが行ったことが次につながるよう支援していく所存でございます。同窓会の皆様には、医学展の更なる発展のためとご理解いただき、ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

(医学展二〇一二実行委員長
医学類五年 山本 森太郎 記)



教授退職記念講演会・記念式のお報せ

本年度をもって退職される経血管診療学(旧放射線医学) 松井修教授ならびに昨年十一月九日をもって退職されました分子移植学(旧産科婦人科学) 井上正樹教授の退職記念講演会ならびに記念式が下記のとおり開催されますので、ご案内いたします。

一．記念講演会

日時 平成二十五年三月二日(土) 午後三時から

場所 十全講堂 ホール

演題 「ヒトの寿命に対する一考察」

「画像で探り画像映像下で治療する

—新しい医療の創生に携わった四十年—

井上 正樹 教授
松井 修 教授

二．記念式

日時 平成二十五年三月二日(土) 午後五時から

場所 医学部記念館 会議室

なお、経費節約等のため、贈金者宛招待状は発送されません。
ご容赦ご注意いただければ幸いです。

(山本 博 記)

免除会員の先生方へのお礼

平成二十四年度 会員名簿改訂事業には、お陰様で多くの先生方からの協力を賜りました。多大なるご協力に厚く御礼申し上げます。

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒九二〇・八六四〇

金沢市宝町十三二 金沢大学医学部

十全同窓会 会報係

TEL 〇七六・二六五・二二三一

FAX 〇七六・二三四・四二〇八

E-mail juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

十全昔話

思い出すいづも

深澤 愛子(昭和二十五年卒業)

遠い昔となりました。私は妹と二人金沢医科大学の女子学生一号でした。

終戦の翌年昭和二十一年五月の入学です。先般たまたま金沢大学百五十年誌編纂の計画を知りました。

以前百年誌が刊行されていますが、ずっと気になっていたことがあるのです。その中に女子学生一号として掲載されている写真に三人の女性が写っているのです。後ろの二人はむかつて右が私左が妹旧姓深沢喜代子です。坐っているのは友人の入江チヨ子さんですが、彼女は金沢医大入学と関係ありません。私共は当時の帝国女子医学薬学専門学校薬学科の卒業です。この写真は昭和十八年頃のものと思います。二人の写真が妹の手許に無かったのをこれをお渡ししたのでしよう。そのことを申し上げたくて今回の百五十年誌の係りの方に申し出たのでした。その結果、山本健先生が、その時の新聞に載った写真を快く受け取って下さった上に、その時の北國新聞の記事まで探し出して下さいました。今度の百五十年誌には入学の時の新聞に載った二人の写真を採用して頂き有難く思っております。

私共が金沢医科大学に入学を許可されたのは画期的なことだったので。今では考えられないことですが、それまで大学に女子の入学は許されませんでした。東京女子大、日本女子大、という学校はありましたが、学制上は専門学校に分類されます。

当時の学制は、小学校、中等学校、高等学校、大学の段階に定められていました。中等学校には、中学校、女学校、実業学

校が含まれ、中等学校から高等学校または専門学校に進学します。大学の入学資格は高等学校又は専門学校卒業となります。

女子には女学校と女子専門学校までの入学資格が与えられていましたが、大学の入学資格は与えられていませんでした。医師になる道は当時東京女子医専、帝国女子医専、大阪女子医専の三校がありました。これはあくまでも女子の専門学校でした。

終戦の結果、マッカーサーによつて婦人参政権が与えられました。それと同時に男女同権ということで大学が女性に開放されたのです。私達が専門学校卒業の資格で受験を許された初めての女子だったのです。今まで女子禁制であった大学にはじめて入学したのでから、それはビックニュースだったわけです。

合格が発表された時、新聞社の人が多勢来て、翌日の新聞に大きく報道されました。北國新聞や読売は所謂三段抜きの写真に私共の境遇や履歴を載せました。全国紙では、東大に一人、阪大に一人、新潟医大に一人、金沢医科大の二人は姉妹など出ました。

初めての男女共学ということで、私達は、学内は勿論、金沢市中の注目的になつてしまいました。男女共学の感想を訊きに新聞記者が来たり、はては事を起こすにいつぱしの知識人のように意見を求められたり座談会によばれたりしました。

その年の入学は六十四名でした。高等学校が短縮になっていたためその年の入学生は無かったのです。旧軍人、陸軍士官学校、海軍兵学校の卒業生、満州大学、台北帝大からの転校、専門学校の卒業生からなり、女子二人の異色のクラスでした。軍人に対しては総数に制限があった為定員八十名に満たなかったということです。

陸軍は、陸軍少佐から少尉まで、海軍

は海軍大尉から少尉までいました。着る物がありませんから、皆軍服です。今思っても颯爽たるものでした。

四年間の学生生活は大らかで楽しいものでした。教授の方々はそれぞれ風格があり、伝説や逸話を先輩から聞かれました。今思うとどうしてあんなに時間があつたのか不思議なのですが、上級生や同級生の人々が私共の家に遊びに来ました。父は当時金沢市立工業の校長をしていて、私共は地元だったので、食べ物もお芋などはあつて、下宿している人達には格好の集まり場所だったのかも知れません。

旧制大学の四年間の学生生活を過ごし、一年間のインターンを終えて全員国家試験に合格、医師の資格を得ました。妹は結婚し、私は眼科教室の倉知教授の許で三年間助手を勤めた後、大船共済病院(今の栄共済病院)に三年お世話になって、その後現住地に開業し、開業生活三十五年の後、七十五歳で廃業しました。妹喜代子は三人の子供をもうけ、保

身辺雑記

武川 昭男(昭和二十九年卒業)

昭和三年生まれの八十三歳になります。が、この年になりますと、出身小学校(金沢市立石引)は名前も、校舎も消滅してしまい、何のご縁か、長男の嫁の母方の祖父が、私が石引小学校にいた頃の若い体育の先生であつたことが唯一の縁。せめて小学校くらいは、永久に名前と場所を変えないで欲しい。その点、我が母校は金沢医科大学から、名前は変わつても、今も同じ小立野台地に建っているのは嬉しいことです。石引小学校は、その隣にあったのです。私の生家の隣に、下山事

健所長などしましたが、六十六歳で亡くなつてしまいました。妹の夫で脳外科の教授であつた山本信二郎も亡くなつて十年になります。私は、廃業してもう十六年、往時は茫々夢のようです。

私は幼時ポリオに罹患、肢体不自由で、女学校さえ無理に入れてもらった身でした。父はいつも私の将来を心配していました。大学の入学試験にそれが問題にされなかったことは僥倖だったと思っています。ただ一人の男子だった兄が戦死し失意の底にいた父に、私達の入学はこの上も無い朗報でした。そうして、結果として私が両親を看取ることとなり、十分な孝養を尽くせたことを有難く思っています。

私共のクラスはその入学が五月だった事から、五月会と名づけられ年々集まつていました。それも何時か終りとなりまして。今は級友の山崎信様が世話をして下さるのですが、年賀状に級友は六十四名中二十三名となりました。と書かれていました。

件の鑑定で有名な、法医学の古畑種基教授のお宅がありました。幸いに、旧制中学校は元の場所(泉野)にありますし、旧制高校(四高)も、名前は消滅しましたが、校舎は香林坊に残っています。

日本の平均寿命が延びたせいか、七十八位の私共の同級生の大半は、今も元気で働いています。クラス(しんがり会)の世話役をやつて下さっている倉西久雄君などは、熊笹御堂外科医局から内科の斉藤昌道君と共同で開業し、永く石川県医師会の役員をしておられました。内科の山田君のように、富山で働きすぎて、早くに亡くなられた方もおられます。私がクラス代表で、山田素良君の弔辞を読んだときは感無量でした。当時の

『心の弱さ』

中村 彰 (昭和三十四年卒業)

◆元旦夜の急患

開業当初の元旦の夜、激しい腹痛を訴えて飛び込みの患者さんが来院されました。夫の実家の金沢市に帰郷するために、大阪から車で走っている途中で腹痛があり、次第に強くなり夫の実家に相談して近くの当院を受診したとのことでした。患者さんの顔を見ただけで、「子宮外妊娠」と推定されるような状態でした。ダグラス窩穿刺で血液を証明、本人と家族に「子宮外妊娠です。直ちに手術が必要です」と説明。三十数年前ですので、現在のように病診連携がスムーズな時代ではありませんし、かつ、患者さんの状態が一刻も早く手術が必要で、他院へ送っている余裕がありませんでしたので、直ちに手術を行うことにしました。まず、スタッフ看護婦を集め、大学の助教授に電話して協力を頼み、血液センターに血液を依頼・注文しました。

◆腰椎麻酔は危険で、不可能

当時は、子宮外妊娠手術は腰椎麻酔で行うのが一般的でした。血管を確保して腰椎麻酔をしようと思いますが、血圧が低くて腰麻ができる状態ではありません。輸血を速く入れても血圧は上がりません。外科系の先生方、こんな時どうしますか？とにかく、出血場所を確かめてそこを止血することが必須だと考え、逡巡している場合ではないと、無麻酔で手術を始めました。患者さんはショック状態に近くて「痛い」とは言いませんでした。腹膜が見えてきました。腹腔内は典型的な出血の色です。

◆危ない、手術をしなければよかった

腹膜をつまんでメスで小さく切開しま

医学校生活は敗戦後間もない頃で、学業の他に、今の人には話しても理解できないくらいに暮らした貧しさがあり、それを思い出して、言葉に詰まったことを思い出します。私は基礎医学（病理）出身なので、専門の病理解剖を通じて思い出すことは、若い医師の方が、糖尿病の治療中に全身の痛みを苦しみ、最後は昏迷状態に陥り、精神科の鳥居方策君（同級生）の所で亡くなられた症例です。私とその病理解剖を引き受けたときは、私が、金沢大学大学院を終了後、ニューヨークに渡り、病理のレジデントを四年間修了後、病理専門医試験に合格して、元の石川病理学教室に助手として戻ったときでした。病理解剖室には当時の第一内科武内重五郎教授（私が留学中、わざわざ訪ねてくださった。他にも、眼科の倉知与志先生なども。我が母校の先生方は卒業生の面倒を本当によく見てくださいました）、結核研究所の柿下正道教授（筆者の恩師）など、多数の人が詰めかけていました。診断がついていなかったのです。アメリカ帰りの腕前をみてみようと、思われたのかもしれませんが。ともあれ、開腹後最初に胆嚢が腫れていることに気がつきました。その時私はピンときたのです。全身が痛い。胆嚢が腫れている。当時の病理解剖室は石川病理教室の隣にあつて、私の部屋は、すぐそこです。私は、胆嚢壁の一部を採って教室に戻り、自分で凍結切片を作製して顕微鏡で診ました。紛れもない結節性動脈周囲炎です。私はその顕微鏡と標本を持って病理解剖室に戻りました。多少の演出はあったかもしれませんが。なにせ、若いのですから。その後の解剖は、診断が分かったあとでは一気呵成。その症例は後に鳥居君と共著で、脳膜や脳の動脈にも炎症が及んでいたので珍しく、脳神経学

会誌に発表しております。また、柿下先生はその症例を医師会のCPCに私を連れ出して下さいました。当時は、今と違って（CTやMRIはない時代）臨床診断が付にくい症例が多く、CPCが盛んでした。実は昔から結節性動脈周囲炎はPathologist's disease（病理の病気）といわれていて、臨床診断が付にくい病気だったんですが。今は皮膚生検などの普及で、容易に早期に診断できる時代です。それでも、日本では、病理医は医師として扱われていません。

私は、内灘にある金沢医科大学（学校法人）の創設時に、初代の病理学教授として、その創立に携わりました。特に病理学教室を設計段階から始めるというめったにない機会に恵まれました。色々なことがありましたが、なんとか定年まで勤め（亡くなった父が、学校の先生だけに、はなるな（本人も学校の先生でしたが）と申しておりましたが、分かるような気がします）、さて、この後どうしようかと思いました。私は同年齢の人とは、永い外遊生活のため、国内の就職年限が十年間短く、当然、年金は同年代の人より低額なのです。幸い勧める人があつて、臨床検査会社の病理検査を行う仕事についています。顧問として、病理診断件数に応じて報酬を受けています。アメリカ病理専門医の資格を持ち、FACAP (Fellow College of American Pathologists) でもありますので、沖縄の米軍病院の病理でもやろうかとも思いましたが、年も年です。ところが、この検査会社というのがくせ者で、毎日割り当てられる一日当たり、平均二十例程度の生検、手術材料を診ています。これは大変な数なのです。最近二年間はその他に、富山の病院の乳癌手術の術中迅速凍結診断を往復三時間かけて毎週二日間出かけていま

す。第一線の病院の生検というのは、油断も隙もありません。大学にいた頃は教室員も大勢居たし、大体どこかで診断が付いていたものの確認例が多かったもので、比較になりません。初めて、第一線の医療の難しさが分かりました。幸い、大過もなく（ひどい誤診もあったのですが、お許しを頂いて）、大学を辞めてから、十年以上現在も続けています。私が医学部を目指したのは、（本当は高校では理甲といって、理学部、工学部コースでした）当時、家族に病人が多く、医者になつて家族を治してやりたいと思ったのです。が、病理に行つてしまひ、家族にしてやれたことは、父親が胃癌で亡くなったときに、その病理解剖をしたことぐらいです。留学中で発病に気がつかなかったのです。これには、こたえました。このときも同級生の外科の矢崎君に世話になりました。でも、いまでは、家族ではないが、病人の助けになつているように感じています。ヒポクラテスが言つたように、医師は病人から報酬を貰つてはいけないうい倫理は守れませんが。

夏目漱石がロンドンに留学中、神経衰弱になったことは有名ですが、私もニューヨークに着いて病院に勤め始めた頃、ひどい適応不全症 (maladjustment syndrome)（後に精神科の医師から告げられた病名）になりました。若い研究者が海外で勉強されることも多いと思いますが、急な環境の変化に耐えられるように、心のゆとりを持って精進してください。研究の成果が出なくても、外遊の気持ちで割り切ってください。

した。その瞬間、勢いよく血液が噴水のよう吹き上がり、道路で水道管が破裂して水が噴出すような勢い。この時、まず思ったのは、「危ない、やはり手術をしなければよかった。他の病院へ転送して手術をしてもらえばよかった」ということです。しかし、今さら何を考えても遅すぎます。輸血用の血液を再注文し、顔にかかった血液を拭く間もなく、直ちに血液を吸引し、出血部位を確認します。予想通り左卵管破裂です。すぐペアンで挟んで止血しました。その途端に脈拍が触れ血圧が測定できるようになりました。後は型通り子宮外妊娠破裂の手術を施行して閉腹し何とか無事終了です。一時、ひよっとして危ないのではないか？と思った患者さんの命を救うことができたのです。

◆一難去ってまた一難

無事手術が終わってホッとする間もなく、お産で入院していた方の分娩です。スタッフや元日の夜手伝ってくれた助教授がいる間に産、ところが、どんどん出血して止まりません。子宮頸部裂傷部を縫合し、そこ以外に産道からの著明な出血は認められません。弛緩出血です。輸血が必要な状態で、また、血液センターへ今夜三回目の血液注文です。残っていただく助教授やスタッフの懸命な協力でも状態が好転しません。一難去ってまた一難、家族を呼ぶことにして電話します。しばらくして夫が来院しますが、元日の夜（もう日付が変わって二日になっていたが）です、大量に飲酒したのか、酒のおいがあります。「赤ちゃんは無事に生まれましたが、その後出血が多く、大学の助教授にも来てもらいスタッ

フを集めて輸血もし、止血に努力していますが、危険な状態です。何とか止血するように全力を挙げてやります」と説明すると、酔っ払っている夫は「エーッ、死んでしまえ。かまわんぞ」と無責任な発言。「はい、そうですか」とはまさか言えませんから、さらに輸血をするために四回目の血液を注文して止血とショック状態との改善に一同力を合わせます。

◆一人しか助けられないのなら

このお産をした患者さんが危険なショック状態になった時、心の中に思ったことは、「先の患者さんは、危なかったのが何とか助かった。この患者さんも全力を尽くして救命したい」という当然の考えと、「どうしても一人しか命を助けることができないのなら、このお産の患者さんの命を助けてほしい」との思いでした。ここに、「心の弱さ」を感じます。医師にとつて、「この命は大事だ、しかし、あちらの命は大切ではない」ということはありませぬ。命に軽重はありません。この人は救命する、別の人はどうなっても知らないというわけにはいきません。これは、誰でも理解していることです。しかし、不幸にしてどちらかの患者さんが亡くなるとしたら、子宮外妊娠の患者さんの家族には、「全力を尽くしましたが大抵という遠くから車に揺られて来られて時間が経っていましたので、残念ながら手遅れで助けることができませんでした。二回も輸血を運んでもらい、大学の助教授にも手伝ってもらったのですが救命できませんでした」と説明するほうが、お産の患者さんが亡くなった時の説明よりも無難なような気がしたのでしょうか。

◆交差試験なしの輸血、小回りが利く

お産の患者さんも、助教授の尽力等で止血でき救命できました。二人の患者さんの命を助けることができた時には、苦しい、長い夜が明けてきました。小生の手術衣の前は乾いた血液で覆われていました。気付いたらいつの間にか裸足で手術室・分娩室を走り回っていました。元日の夜から二日早朝にかけての大量出血連続二件を何とか救命できたのは、多数の人の協力と幸運の賜物としか言いようがありません。四回の輸血では当然、交差試験をする余裕がありませんでしたので、交差試験なしで施行しこれも幸運にも異常なく無事輸血でき、ショック状態が改善できました。

二人とも救命でき、一段落した後、助教授は「二人とも、大学病院だったら亡くなっていたかも知れない。個人病院で小回りが利き素早く対応できるが、大学病院では書類が必要だったり、看護婦集めに時間がかかったり薬品を薬剤部へ取りにいったりして手遅れになった可能性がある」と話して慰めてくれた。

◆「塞翁が馬」、「禍福は糾える縄」

分娩後の弛緩出血で苦労していた時に、前述のように「もし、一人しか助けることができないのなら、子宮外妊娠破裂の事例は亡くなってもやむを得ない」と考えました。「心の弱さ」と表現しました。しかし、よく考えてみると、子宮外妊娠の患者さんが来院しなかったら、その患者さんの手術を実施していなかったら、分娩後の弛緩出血の人は亡くなっていたのかもしれない。この人が助かった救命できたのは、助教授をはじめ多数のスタッフがその時病院内にいたか

らなのです。子宮外妊娠の患者さんが来院していなかったら、当然分娩後の弛緩出血の時には、助教授をはじめ多数のスタッフがいないわけですから、人出不足で対応が後手に回り、酔っ払った夫が言ったように死亡していたのかもしれない。「人間万事塞翁が馬」、「禍福は糾える縄の如し」ですね。何が幸いするか分かりません。この日の幸運がなかったら、現在まで診療を続けることはできなかったと思います。



学生コーナー

コーヒーブレイク

医学類 四年 谷中 惇

世の中には、二種類の人間がいるのです。今の自分に満足している人間と、満足していない人間。これを読んでいただいている方は、一体どちら側の人間でしょうか。どちらの方が良いということはないです。どちらでも悪くないと思います。世の中は政治のこととざわついて

いるようですが、私たちは講義室の中、椅子にお尻を痛めつけられながら季節の変遷を感じ取っています。どうも申し遅れました、医学類四年の谷中と申します。四年生になって以来、もう随分長い間この第三講義室にいるような気がします。級友たちは皆、それぞれ自分のクツションを持ち込み、自分の臀部を死守しています。今年度から少しカリキュラムが変わり、一週間当たりの講義数が増え、天気の良い日も悪い日も講義室の中、講義を受けるような状況になっています。臨床講義に満ち溢れた日々を楽しんでいる人もいるような気がします。多くの人は、去年までの様な自由な時間は激減し、ストレスを感じているのではないのでしょうか。かくいう私もどちらかと言うと後者ですが、先日、四限目の講義をもっていた先生が「この後にまだ授業あるの!? もっと健康的な生活を送った方がいいと思うんだけどねえ。」と言ったことが未だに記憶に残っています。学生はほぼ全員の「カリキュラムを組んだ奴に言ってくれよ」という心の叫び声が講義室中に間違ひなく響き渡っていました。

四年生になり、各科の講義を聴き、テ

ストに臨んでいくたびに感じることは、二年生以降に習ってきた解剖、生理、生化学などの講義で学んだ知識というのが、当たり前であるけれども、非常に大事であるということです。血管の走行、臓器の配置、各臓器内の構造物、そしてその働きと、臨床科目の内容はその知識を元にして成り立っていると、勉強していけばしていくほど感じさせられて、どうしてここまでマジメに勉強してこなかったのかという後悔が尽きません。まあそんなことを言っても何も解決はしないので勉強するだけなのですが。

話は変わりますが、最近気になっていることがあります。それは、「講義開始から、講義の終了まで、一体他の人が何をしているのか」です。自分は結構前方の席に座っているのですが、いつもは皆の姿を見ているわけではないのです。しかし、今一度確認してみる。前を向き、医学に食らいついている学生、二割。惜しくも机の引力に負ける学生、二割。目だけは開いているが、生気を感じない人、一割。机には頼らないが、魂を抜かれている学生、一割。個人的に勉強をされている学生、二割。完全に違う世界に旅立たれている人、一割。透明化している人、一割。といったところですかね。お昼の講義中にぎっくりと見たただけなので、詳しくはわかりませんが。ちなみに僕自身は、どちらかと言うと机と仲良しです。大学生の夜は長いのです。お昼は眠い。

そういえば僕自身はコーヒーがかなり好きです。先ほどの話にもあったように、講義が長いと必然的に眠気は襲ってきます。机も大好きなんです。いつまでも寝ているわけにはいけないので、眠気覚ましにコーヒーを飲みます。最近は朝来る道中で一本、お昼に一本、夜勉強する時はさらに一本の缶コーヒーを消費する日々が続いています。健康面が非常に心配です。昔、谷中少年は、コーヒーを良く飲んでいたので胃潰瘍になった母をこの目で見ていたのですが、同じ道をたどるのでしょうか。しかし、コーヒーを飲んでいると何となく落ち着く気がします。休憩時に飲んでいるコーヒーは、何とも落ち着くものです。勉強にも、休憩が必要。

「学生時代は良く学び、よく遊べ」という方と「学生時代は良く学び、良く学べ」という方がいますが、どちらが正解なのでしょう。学生だからこそ、「遊ぶべきなのか。はたまた学生だからこそ「学ぶべきなのか。自分なりに悩んでたどり着いた究極の答えは、「学生時代は良く遊び、よく遊べ」なのです。そもそも、医師になるために学生時代に学ぶべきことは想像を絶するほどたくさんあるのです。学生時代に全てを完璧に理解して、学び、体得して、医者として働いている人などそもそも存在しません。そんなものはイマドキ女子が考える理想の彼氏と同じくらいに存在確率なのです。むしろ、医師として働きだして、そこで学んだことの方が圧倒的に多いというのが現実でしょう。だからといって勉強はしないというわけではありませんが、大学時代に知り合った、お酒を飲みかわせる仲の深

まった友人が近くににいるうちに、ひとつでも多くの想い出を作るといいうのも、人生の中では大事なことなのではないかと最近では思っています。

世の中には「今の自分に満足している人間」と「今の自分に満足していない人間」が存在すると言いました。満足している方はもちろんいいことだと思えます。しかし満足していない人は、自分の直さないといいけないところが見えてくる、という見方もできます。自分は正直、今の自分には満足できない部分がたくさんあります。過去を振り返ってみても、満足している瞬間と、満足していない瞬間があったように思います。もちろん医師になる以上、勉学に励むことは学生の本分なのでやっています。その中でも一瞬一瞬が「満足していた」と振り返れるように、一生懸命に今を生きて、「良く遊び、良く遊べ」を徹底しようと思っています。「変えられない過去はあるが、変えられない未来はない」という言葉もあります。学生の間ももちろんそうだと思いますし、医師になってからも、楽しめるものは最大限楽しんでいこうと思います。後悔のない人生を送るために。



第六回ホームカミングデイに延べ五〇〇名 今回は第五十回金大祭期間中の二〇一三年十一月二日(土)

昨年の十一月十日、金沢大学角間キャンパスを中心に第六回金沢大学ホームカミングデイが開催され、歓迎式典、学生会第二回役員総会、留学生ホームカミングデイ、部局独自歓迎企画等に卒業生、



歓迎の挨拶を述べる
中村信一学長

在学生、教職員など延べ五〇〇名以上が参加しました。

午前の歓迎式典では、金沢大学フィルハーモニー管弦楽団員の伴奏で参加者全員が校歌を斉唱後、中村信一学長と深山彬学友会会長が歓迎の挨拶。続いて、課外活動の振興に顕著な功績があつた学生への学長表彰、昭和四十九年工学部卒業で飛鳥建設株式会社代表取締役社長の伊藤寛治氏による記念講演、学友会第二回役員総会が順次開催されました。



深山彬学友会会長

午後には、初の開催となつた留学生ホームカミングデイのほか、部局独自の歓迎企画が人間社会系、理



「インフレ整備の重要性とゼンネコンの役割」と題して記念講演する伊藤寛氏

工系、医薬保健系で開催され、学類等の概要



▲歓迎式典(角間キャンパス自然科学大講義室)



◀高安賞創設10周年・臼井国際医学奨学金創設5周年記念シンポジウム(医学類G棟)

や教育研究の現況説明、同窓生との懇談会やシンポジウムに卒業生等が参加。また昨年で三回目となつた金沢城公園五十周年記念のホームカミングデイ記念懇親交流会にも多くの卒業生と家族、教職員等が集い、旧交を温めました。

(学友支援室長 西谷 公作 記)

行事 / 参加者内訳		卒業生	在学生	教職員	その他	計
歓迎式典 / 学友会役員総会		127	10	38	0	175
留学生ホームカミングデイ		10	50	32	13	105
部局独自歓迎企画	人間社会系	9	0	17	1	27
	理工系	24	1	22	0	47
	医薬保健系	17	14	24	7	62
ホームカミングデイ記念懇親交流会		80	0	15	8	103
計		267	75	148	29	519

金沢大学医学部 十全同窓会会報編集委員のご紹介

学内編集委員は、中村信一、加藤聖、山本健、山本博、山岸正和、太田哲生、大島徹(編集委員長)、中村裕之、和田隆志、佐々木素子、若山友彦、中西清香の十二名。学外編集委員は寺畑喜朔、山口成良、柿下正雄、津川龍三、興村哲郎、多留淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、勝田省吾、大村健二、横山仁、横山修、常山幸一の十五名。以上二十七名で構成されています。本年もよろしくお願い申し上げます。

編集後記

ここ数日の寒波に伴う突然の風雪で、あつという間に十数センチの積雪を記録するようになってきました。三十数年前の学生時代に、解剖学実習を終えて帰宅しようとしたところ、日中には無かった雪が膝上まで降り積もり、これをかき分け深夜の道を急いだことを思い出してしまいます。さて、今回の総選挙は、ある程度結果の予測は出来たものの、「これほどまでか」と思われた方も多かったのではないのでしょうか。どんな変化にも対応できる、強靱な心身を日頃から備えておくことが肝要なことを改めて感じています。そのような激動の中、金沢大学では未来に向かっての歴史の検証がなされました。昨年は創立百五十周年記念会が盛大に開催されましたことは記憶に新しいところです。また、今回の記事にもありますように、高安賞創設十周年記念シンポジウムでは、過去十年間大学院学位論文に対して授与されて参りました高安賞受賞者の方々による成果報告がなされ、受賞者の皆さんが引き続き一線の研究者として活躍されていることが印象づけられました。長い歴史の中での検証とそれを踏まえての発展を改めて願うところです。実際、秋の叙勲での同窓会先輩の受賞、また山梨大学歯科口腔外科教室への教授輩出など、本学で活躍された先生の評価が窺えるところです。本学附属脳・肝インターフェースメディスン研究センターには新教授が着任されました。今年「探究心と情熱」の象徴であるといわれています「へび年」です。より崇高な探究心を持ち続けたいと思います。末筆ながら金沢大学十全同窓会員、ご家族の皆様のご健康をお祈り申し上げます。

(山岸 正和 記)